
ゲームみたいな第二の人生を貰ったぜ！

てんびん座

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲームみたいな第一の人生を貰つたぜ！

【NNコード】

N3406N

【作者名】

てんびん座

【あらすじ】

気がつくと、俺はテンプレ通りの真っ白空間にいた。そしてやっぱり神だという人物が現れて、やつぱり転生させてくれるらしい。チート能力はもらえないらしいけど、まあ、楽しむとするか。

第零話（前書き）

他の作品がまだ終わっていないのに書いてしまいました。

第零話

「……………？」

そこは白かった。視界の端から端まで全てが白く、果てがない。声を出しても反響すらしないことから、とても広い空間であることがわかる。

「俺はどうしてこんな所に……？たしか、近所のコンビニに行つて、それから……」

「死んじまつたんだなあ、うん」

背後から聞いた声に彼は振り返つた。そこには白衣を纏つた金髪の博士風な男がいた。ふちなし眼鏡をクイッと押し上げ、気まずそうに彼を見つめている。

「死んだ？俺が？」

「ああ、そうだ。お前は不幸にも工事現場で起つた倒壊に巻き込まれ、全身をミンチにされて死んだ。証拠に写真見るか？」

「……………いえ、結構です」

確かに、彼にはつづらつたが家の近くに工事現場があつた記憶があつた。おやぢへ、そこでの事故のことだつた。

「お前、名前は思い出せるか？いや、前世の記憶は？」

「え、ああ。俺は……」

そこで口がピタリと止まった。自分の名前が全く思い出せなかつたのだ。それだけではなく、自分の家族の顔も経歴も、自分の年齢すら思い出せない。所々が虫食いのように穴だらけになつていた。

「やっぱりか。わかつてるとは思うが俺は神だ。お前は生前、二次創作が好きだつたらしいから意味はわかるな？」

「まさか……」

「そうだ。実はな、その事故は本当は起こらないはずだつたんだよ。二次創作でテンプレの『書類に「一ヒー』のパターンだ。いや、本当にひっかりしていた。マジですまん」

その時、彼はネットで見た展開を思い出していた。チート能力やイケメン、果てには「うなどやりたい放題の展開になるといつものだ。

「えーじゃあ俺死んだのか！？」

全くもつて寝耳に水であった。別に彼は自宅警備員でも、学校で孤独な存在だったわけでもない。未練だつてまだある。

「マジで悪かったな。侘びとして好きな世界に転生してくれて構わねえ。ビートの世界が良い？」

「マジか」

「マジだ

本当に全てテンプレ通りだつた。

「それなら『魔法少女リリカルなのは』の世界にしてくれ

彼がその世界を選んだのは単純、記憶に残つてゐるアニメがそれくら
いしかなかつたからだ。炸裂する砲撃、知覚すらできない高速移動、
心躍る近接戦など、頭の中に鮮烈に残つてゐる。

「…………あ～、あそこか～」

神は遠い目をして呟いた。

「まあ、わかつた。ただし、転生つてのは本来かなりの例外イレギュラーなんだ
よ。だから良く見る二次創作みたいに他作品の能力を附加するのは
無理だ」

昔ならいざ知らずな、と神は付け加えた。

「だが、お前にはできるだけ好条件な状態で転生させてやる。これ
が俺にできる最大限だ」

「…………そうなのか、わかつた。色々とありがとうな

「おう、気にすんな。元々はこいつのミスだ。第一の人生、楽しん
でこい」

神がそう言つた瞬間、彼の足元に穴が開き彼は声を出す間もなく落
ちていつたのだった。

「いや～、今回はマジで冷や汗もんだったぜ」

被害者の彼が転生していった瞬間、近くの空間が光に包まれ、そこから簡素なパイプ椅子が現れた。神はそれにどっかりと座る。

「はあ～、もし俺TUEEEEが良いとか抜かす転生者だったら面倒なことになつてた。転生できるだけで満足な馬鹿で助かつたな」

実際、かなりの好条件で転生できるようには取り計らつた。彼の第一の人生は刺激に満ちたものになるだろう。

「いや～、それにしても、書類に「コーヒーかけたら本当に人が死ぬのかつて実験だったが……。はあ、これはもうやらねえ方が良いな」

しかも、

「つたくアイツら、調子に乗つてかけまくりやがつて」

そう、実はかけられたのはコーヒーだけではない。

メロンソーダ、サイダー、コーラ、ケチャップ、マヨネーズ、ウスター・ソース、タルタルソース、牛乳、豆乳、青汁、スポーツドリンク、ココア、紅茶、ウーロン茶、麦茶、ほうじ茶、オレンジジュース、アップルジュース、ぶどうジュース、マンゴージュース、バナナジュース、カルス、ヤルト、灯油、ガソリン、泥水、砂糖水、食塩水、果てには人間の生き血などを大量に。

「部下が仕事を増やしてどうすんだよ」

その部下たちには、彼を最高に持て成すために同じ世界に転生している。ただの人間一人としてあの世界を盛り上げるためだ。なぜ神がここまでするのかというと、他の神が好機とばかりにこれを材料にして反抗してくる可能性があつたからだ。この神は他の神の中でもかなり嫌われているため、充分にあり得る話だった。ならば、そのことが露見しなければ良い。あの転生者にはせいぜい幸せな人生を送つてもらって、万が一にも他の神に文句を言つことがないようにななければ。

どうせ神なんて自分の仕事で手一杯だろうから言われない限りはバレないだろうし。

「ま、せいぜい隠蔽に付き合つてくれや、転生者くんよ」

そう呟き、最高神こと教授は溜め息を吐いた。

第零話（後書き）

勢いで書いてしまったので、更新速度が遅いです。

今回は前作や前々作の主人公たちとは全く関係のない一般人が主人公なので、外道は…………ありません、たぶん、きっと、おそらく、その予定です。たまには少年漫画みたいなのを書いてみたいなと思って始めました。

もう一作の方が中心なので、更新停止はありません。どうぞ安心を。

第一話

「アスカぐ～ん、起きてください～」

心地の良い声が、彼を眠りの底から引き上げようとしていた。しかし、その声はまるで子守唄のように彼の脳内に木霊し、彼をさらなる眠りの世界へと誘う。

「アスカぐ～ん、起きないと幼稚園のバスが来てしまいますよ～？」

美声が再び声を発し、さらにユサコサと彼を揺すって起床を促そうとしてきたが、それは逆効果だった。半覚醒だった彼の脳はどんどん機能を停止していき、

「必殺のフライングボディープレス」

絶対零度の宣言とともに完全覚醒した。

「うひふー。」

「抉りこむように、打つべし打つべし打つべし

さうに声の人物は彼 アスカ＝イクシオンの胸に跨り、レバーを執拗に攻撃してくる。ボクサーかお前は。

「起きる、やもないとクロスゾ」

「げホッ、はいっ一起きましたー！」

必殺の連續攻撃に、流石のアスカも目を覚ました。寝巻きの胸倉を掴まれた彼の目に涙が溢れているのは、寝起きだからではないだろう。

そして、彼を起こした張本人はコロリと態度を元に戻し、

「おはようござりますー、アスカくん」

何事もなかつたかのよつて手を放した。

彼、アスカ＝イクシオンは転生者である。両親は出張などで家を空けることが多いため、隣の家であるここ、北条家に居候しているのだった。そしてこのボクサーもどき 北条 瑠奈はこの家の一人息子である。しかし、その容姿はとても男であるところを信じられるものではなく、実に少女らしかつた。

まず、髪が長い。腰に届くほどはある。そしてその髪は銀髪で、顔は色白、瞳は蒼穹のように透き通った青色と、全く日本人らしくなかつた。彼の曾祖母が北欧系らしいので、その影響らしい。

「ほらほら～、ボサツとしてないで朝～はんにしましちゃう～。今日はアスカくんが好きな和食ですよ～」

そう言つて瑠奈はルンルン と部屋から出て行ひつじ、

「一度寝したらコブラ・ライストな？」

そつ言い残していった。田が本気だった。

「……やれやれだな」

アスカは溜め息を吐き、幼稚園の制服に着替え始めた。時刻は七時、これから朝食を食べれば充分に間に合つ時間だろう。そして彼は壁に掛かっている鏡で軽く身だしなみを整えた。母親譲りの日本人風な黒髪黒目と、西欧系の父親譲りのそこの整った顔立ちが映る。

「黙つていればイケメン、か？」

自分がイケメンの部類に入るのかどうかを推察しながら、アスカは一階のリビングへと降りていった。

そこには、朝のニュースを見ながら二人分の朝食を用意している瑠奈がいた。彼の両親は朝早くに出勤してしまつたため、自然と朝食はアスカと二人きりになるのである。

「それでは、いただきます～」

「いただきます」

そして、アスカは瑠奈がつくつた朝食にありつくのだった。

† † †

「アスカくんつて大人びていますよね～」

幼稚園に向かうバスの中、瑠奈が突然そんなことを言い出した。

「そうか？ 瑠奈の方が大人びてるだろ。料理できるし」

「そんなことないですよ～」

実際のところ、二人は周囲の中では大人びていた。

アスカは転生者である。生前は何歳だったのかは既に記憶にないが、それでも彼は幼稚園児と比べれば充分に大人だ。それと同等の瑠奈の方が、アスカには不思議であった。

「黙つていれば可愛い幼馴染で通るんだけどな」

「私は黙つていなくても可愛いと評判ですよ。もつ女の子みたいな顔だからかわれるのには慣れました」

アスカが瑠奈と出合ったのには、それが大きく関係している。去年の冬、彼は同じ幼稚園で虐められている瑠奈を見つけたのだ。当初は関わる気など微塵もなく、「子供って残酷だな」とくらいにしか思っていなかった。しかし、ある日を境に虐めはパタリとなくなった。その理由を、アスカは目撃してしまったのだ。

「いやいや、その報復に年上の奴までボコボコにするような奴は可愛いとは言えないだろ」

そう、ボコボコにしたのだ。

二度と逆らう気が起きないよう、サンドバックのように年上の園児を殴り、仲間を引き連れて戻ってくれば仲間ごとサンドバックにした。それを続けた結果、瑠奈は幼稚園のガキ大将を超えた霸王となっている。しかも、先生には露見しないように細工すら行っていたのだ。

「相手を選ばないから悪いのですよ。ほら、人は見かけによらないと言いますし」

「お前が言つと説得力あるな」

事実、園児の中で瑠奈を軽んじている者はもういない。瑠奈が万引きしろと言えば、おそらく園児は泣く泣く万引きするだろ？。それほどに瑠奈の影響力は絶大だった。

＋ ＋ ＋

幼稚園の卒園は、アスカが思つていた以上に早かつた。瑠奈と出会つて数年、ここが『魔法少女リリカルなのは』の世界であることを忘れかけてしまうほどに。実際問題、アスカは転生の際に記憶のほとんどが塗りつぶされていたため、原作の知識は殆どが抜け落ちていた。

「あ～、なんか幼稚園時代の中にやつとかなきゃいけなかつたことがあつた気がする」

「急にどうしたのですか～？」

「いやさ、誰かに会わないといけなかつた気がするんだよな。誰だろ？？」

「……そうですか～」

その言葉をアスカが呴いたのは、一人が私立聖翔大付属小学校の入学する日だった。

いつものように殺人技（今日はジャイアントスイングだった）で目を見ましたアスカは、別に小学校に入学するのが初めてという訳でもないため、たいして緊張はしていなかつた。ただ、この学校の名前を聞いた瞬間、何か引っかかりのようなものを思い出したのだ。

「まあ、別に良いか」

「ですね~」

そして同じクラスとなつた二人は教室に移動し、それぞれの席に着いた。並び方は五十音順だつたため、一人の席の間には若干の開きがあつた。チラリと瑠奈の方を見ると、こちらの視線に気づき、軽く手を振つてくる。

その時、担任教師と思われる女性が入室してきた。そして入学を祝う言葉を述べた後、生徒同士での自己紹介をすることになった。アスカは苗字の関係で出席番号は一番。よつて、最初に自己紹介をすることになった。

「あ~、アスカ=イクシオンです。名前が外人みたいなのは父親が外国人だからで、向こうの言葉は話せません。趣味はゲームで好きな食べ物は和食全般です。よろしくお願ひします」

そして一礼。教室に拍手が響き渡つた。

その後はアスカの自己紹介を参考にしたような自己紹介が続き、そして、

「はい、良くできました。それでは次の人」

「は、はい！」

その声は、どこかで聞いたことがある気がして、

「た、高町なのはです~み、よろしくお願ひします~」

その栗色のツインテールと薫色の瞳はどうかで見たことがある気がして、

「高町、なのは？」

思わずアスカはその名前を呟いた。

その後にあつた瑠奈の自己紹介は耳に入らなかつた。

第一話

『それでは、次のニュースです。全国で頻発している児童誘拐事件の』

「最近は物騒ですね~」

茶碗を片手に、瑠奈は呟いた。余つた方の手は、肩にかかるほどの中短さになつた銀髪を弄つてゐる。流石に男子であの髪の長さは校則違反だつたため散髪したらしい。両親は大反対だつたらしいが、対するアスカはそれに応えず、ジツと考え続けていた。

同じクラスの高町なのはについてである。

入学してからの彼女の印象は、とても大人しいというものである。特定の誰かと仲が良いという様子もなく、やや人見知りといった感じのする、どこのクラスにも一人はいそうな、極めて普通の少女だつた。唯一目立つたことがあるとすれば、最近になつてクラスの女子一人と仲良くなり始めたことくらいだらうか？

そんな彼女に、なぜ自分は目を引かれたのだろうか？

「アスカく~ん? 大丈夫ですか~?」

「……ツ、ああ、悪い、何だっけ?」

「しっかりしてください~。こここのところ、誘拐事件が多いので気をつけてください~」

「応、わかつた。気をつけろ」

「……大丈夫ですかね~？」

そう言いながら、瑠奈は食器を口付けに流し台へと歩いていった。そんなことよりも、アスカにひとつでは『高町なのは』の方が重要であつた。

アスカが卒園した幼稚園に、あんな少女はいなかつた。かといって、それ以前に会つたという記憶もない。会つたこともないのに気に入る理由となると、アスカが思いつくことはそつ多くなかった。

「これは、原作に関わることなのか……」

『原作』、それはアスカが転生したこの世界で起こる未来と言つても良い。この世界がどういった世界だったかは、その詳細までは覚えてはいなかつたが、彼女の周囲で事件が起ることとは間違いないかつた。それも、アスカの僅かな記憶によれば、それはそつ遠くない。

「俺は、どうするべきだ」

わざわざ転生までしたのだ、物語には当然関わりたい。神が言うには、自分はかなり恵まれた状態で転生しているらしいし、魔力だってあるのだろう。ならば、活躍できる可能性は充分にある。

「よし、とりあえずは原作に関わる高町と仲良くなつておこう。そうすれば便利だらう」

それに彼女の容姿はなかなかに好みだ。物語でもヒロイン級だったのだろう。それならば、彼女と仲良くしておいて悪いことなど一

つもない。運が良ければ、前世で夢見たハーレムの実現だってできるかもしない。

当面の方針が決まったアスカは、鼻歌を歌いながら夕食を続けた。心なしか、普段の夕飯よりも数倍美味しかった気がした。実際、それはアスカの気のせいなのだが、それはそれで良かったのかかもしれない。

これが北条家で食べる最後の食事だつたのだから。

十 十 十

「瑠奈、これからコンビニ行くけど、何か買ってくる物あるか～？」

「いいえ、ありません～。というか、もう暗いですから明日にした方が～」

「大丈夫大丈夫」

手をヒラヒラと振りながらアスカは家を出た。まだ春先なため、夜は少し肌寒い。そんな中、アスカは切れた炭酸飲料を買うために一人コンビニへと足を向けていた。日が沈んだからか周囲には人の姿が見当たらず、住宅街はシンと静まりかえっている。

「いや、絶好の誘拐日和だろ」

一人冗談を呴きながら、アスカは黙々と歩を進めた。

この辺りでは誘拐事件は起こっていない。事件は全国各地で起こっているが、治安の良い海鳴だからこそ、まだ事件は起こっていないかった。そして、これからも起こるとは思っていなかったのだ。

だからこそ、アスカも油断したのかもしかなかつた。

突然の衝撃。

「 あッ！？」

どこかに凄まじい威力の打撃を叩き込まれ、アスカはコンクリートの地面に倒れ伏した。

意識が混濁し、なぜ自分が地面に倒れているのかがわからない。周囲で誰かが何かを話しているのが聞こえたが、エコーがかかっているかのようにはつきりと聞こえない。

「お.....だ.....にも見ら.....て.....い.....？」

「だい.....ふだ、けつ.....いを張.....ている」

「イツらは何を言つているんだ?何がどうなつている?そもそも、コイツらは誰だ?」

様々なことが頭に浮かび、そして消えてゆく。そして段々と視界が暗くなつていき

その日、アスカが家に戻つてくることはなかつた。

アスカが意識を失つた時、彼は近くの屋根の上からその一部始終を

† † †

観察していた。

コンビニへと向かうアスカに、背後から一人の男が迫つて首筋に当て身を叩き込んだのだ。相当な威力だったらしく、アスカは一撃で昏倒してしまった。

「あ～あ、だから気をつけてって言ったのに～」

そう、誰にともなく呟いたその言葉に、

『どうなさりますか？保護されるのならば今しかありませんが』

彼がいつも首から提げている、白いペンダントが応えた。

「いえいえ、これは私 北条 瑠奈の管轄外です」

そう言ってアスカが黒塗りの乗用車に運び込まれる様子を、瑠奈いや、ルナは見つめていた。彼がその気になれば、誘拐はおろか襲撃すら未然に防げたはずなのにである。

それに、トルナは付け加えた。

「これは彼の試練です。教授が仰っていた『人生の好条件』というものは、何も家柄や才能のことだけではありません」

『と、言いますと？』

「人生山あり谷あり、波乱万丈、つまりは『主人公』のような人生のことなのですよ～」

人間、上手くいき過ぎれば必ず飽きが来るものだ。教授はそれを回

避するため、原作に関わらなくとも事件が続くように幸運のパラメーターを設定した。その結果が『これ』だ。

「教授曰く、『文字通り必死に生きてこそ、人生のありがたみがわかる』だそうです。つまり、これは彼が死ぬ気で頑張れば何とかなる試練なのですよ」

『そういうものなのですか

「です～」

少なくとも、ルナはそう聞いている。アスカが人生を諦め、ここで死ぬ可能性もある。その時は、心が折れる前に改めて自分たちの内の誰かが救いの手を差し伸べれば良い。そうすれば彼は再び立ち上がり、鮮烈で充実した人生を歩んでゆけるだろう。

「さてと、それじゃあ私たちは帰りますか。見たい番組がもうすぐ始まってしまいます～」

そう言つてルナ　　いや、瑠奈は無人の路地に降り立ち、帰路に就いたのだった。

その場に漂う、誘拐犯二人が張った人払いの結界の魔力の残滓を残して。

目が覚めると同時に、まどろむこともなくアスカは覚醒した。そのまま寝床から起き上がり、配給されている訓練服に着替える。これらの動作は手馴れた様子があり、いつそ機械的と言つても良い。それもそのはず、アスカがここに連れてこられてから既に一年の月日が経つていた。

一年前のあの晩、アスカを誘拐した二人は次元犯罪者だったのだ。彼らは管理外世界に住む魔力資質を持った子供を誘拐し、その子たちを戦闘魔導師へと育成して将来の戦力として使うという計画の突破口組織だった。子供たちの年齢や性別はバラバラで、十代の中盤のような少年もいればアスカよりも年下にしか見えない少女もいる。どうやら誘拐された子供はアスカで最後だつたらしいが……。

起床して食堂へと移動したアスカは、そこで配給されたパンを黙々と食べた。周囲の子供たちも同じようにしており、そこに会話は存在しない。当然だ。彼らは稀に実戦訓練といつ名目の『殺し合い』をさせられる。それが数回行われてから子供たちの表情は死んだようになつた。周囲の人間が、いつ敵になるのかと思うと、他人と関わる余裕など欠片もなかつたのだ。

「朝食の時間は残り十分だ！早くしろオー！」

アスカたちが誘拐され、この施設にぶち込まれてから一年間お世話になっている教官の怒号が飛んだ。それに反応して、アスカたちの食べる動作が些か忙しくなる。

クソ不味い。

自然とそう思った。別にパンに罪があるわけではない。ただ、瑠奈がつくってくれた食事を食べて学校に行くことがどれだけ大切なことだったのかを、アスカは思い知っていた。転生者で、神が味方になっていて、あまりにも平穏が続いていたからか、生きるところがどれだけ大切なことを忘れていた。

＋ ＋ ＋

訓練は基本、騎士と魔導師の一グループに分かれて行われる。グループ分けの基準は適正であり、そこに子供たちの意思は存在しない。幸か不幸か近距離適正も射撃適正もあり、魔力にも恵まれていたアスカはその中でも最強になつており、専用のデバイスも与えられたいた。もちろん、それは教官たちの指示がなければ展開できず、教官たちには魔法を発動させることもできない。デバイスを管理するAIが自動で制御してしまったのだ。

「こんな時は不便なモンだな、インテリジェントデバイスつてのも」

訓練が始まり、アスカは魔導師グループでの訓練に参加していた。両方に適正のあるアスカは、二つのグループに交互に参加させられているのだ。

直射弾の訓練、誘導弾の訓練、他にも砲撃や収束技能、空戦軌道、魔力制御など、魔導師グループにもやることは多い。これが騎士グループだと徹底的に得物の扱い方を教え、その後に装甲の強化訓練などがある。対人戦に特化させるためだ。

今日も一通りの訓練を消化し、最後はクールダウンをして終えるはずだった。

そう、普段だったら。

「本日はこれより、『実戦訓練』を行う！」

教官の一聲により、子供たちの中に動搖の空氣が伝播した。話し声すら聞こえないものの、その表情にはありありと恐怖の顔が浮かんでいる。

この『実戦訓練』は、訓練場の中央に数人が呼ばれ、そこでその数人が配給されたデバイスを使って戦闘をするというものだ。子供たちへの見せしめという意味合いもあるため、その戦闘は殺傷設定で行われる。そして決闘の形式で行われるそれは、相手が死ぬまで終わらない。

頼む、俺を当てないでくれ……！

祈るような気持ちでアスカは願った。

通常、アスカのように専用デバイスを配給されている者が選ばれることは殆どない。専用機持ちとそれ以外では格が違すぎるからだ。そして、専用機持ち同士がこの訓練を行うこともない。このようなことで貴重な人材を失うことも馬鹿らしいからだ。

それでも、アスカは願わずにはいられなかつた。専用機持ちではなかつた頃、アスカは一人の子供を殺している。この洗脳じみた教育のせいで殺しには微塵も躊躇つことはないが、それでも気持ちの良いものではない。まして、前世を含めて二十数年の時を生きているアスカには辛すぎた。

「これから呼ばれた者は前に出ろオ！ 008番、027番、069番

誘拐された子供の合計は152人。そして、それらの子供たちは番

号名で呼ばれていた。

もともと、152という数字は一年前の話であり、現在は144人に減っていたが。

「071番、131番」「

そして、

「最後に152番！」

最後に呼ばれたのは、最後に施設にやってきたアスカの番号だった。

† † †

呆然としながらも、身体は勝手に指示通りに訓練場の中央に並んでいた。今回呼ばれたのは六人。つまり三組だ。そして、デバイス持ちはアスカだけだった。つまり、これは相手を一方的に殺せという意味である。

何なんだよ、これはッ……！

待機状態のデバイスを握り締め、歯を食いしばる。既に敵の少年は配置に着き、簡易型ストレージデバイスを開いていた。自分と同年代であろうその少年の目は、専用機持ちを相手にすることの無意味さを悟った諦観に満ちていた。それでも、戦うのをやめるわけにはいかない。それが命令だから。

「チクショウツ！！」

『Standby, ready, setup』

女性型の電子音を響かせ、アスカもデバイスを展開した。

アスカの魔力光である銀色の光を放ち、フレームを展開、そして完了。その姿は槍のように先端が尖った杖で、銀色の穂先近くの柄の部分には回転式弾倉(リボルバ)が備え付けられていた。CVK-792

ベルカ式カートリッジシステムである。

槍であり、同時に杖でもある。これがアスカが支給されたデバイス『ベルセルク』だった。

バリアジャケットのデザインはシンプルで、漆黒のジャケットにレザーパンツ、それに同色の籠手にブーツという黒尽くめの格好である。機能性を重視した結果であった。

展開を終えたアスカはデバイスを構え、戦闘態勢に入った。そのまま後悔と罪悪感に溢れている。

「それでは…………始めッ……」

† † †

号令と同時にアスカはスファイアを形成、発射した。

「クロスファイア、シユートー！」

銀色の軌跡を描き、五発の誘導弾が少年に殺到する。少年は咄嗟に障壁を開け、誘導弾を防ぎ切る。しかし、その時点で勝負は決まっていた。

「ディバイン

」

アスカが使つるのは典型的なミッ ドチルダ式の魔法が多い。誘導弾で攻め、その隙を持ち前の魔力を用いた砲撃で躊躇する。バリア强度が高かつたことも、この施設で最強となつた所以だ。

故に、

「 バスター！」

牽制の誘導弾を防ぎきつた時には、既に砲撃の準備は終わっていた。銀色の濁流に、為す術もなく少年は飲み込まれる。張られた障壁は一秒すらも耐え切ることはできず、一瞬で貫かれた。加えて、この訓練は殺傷設定で行われている。アスカが放つた砲撃はバリアジャケットを突き破り、少年の身体を焼き尽くした。

「 そこまで！」

教官の声がかかり、戦闘訓練は終了。

他の組はまだ続けていたが、終わるのを見届けることはできなかつた。

「 152番、良くやつた！ もう血室に戻つて良いぞ」

「 ……ありがとうございます」

デバイスを待機状態フレスレットに戻し、アスカはその場を足早に立ち去つた。他の子供たちの恐怖と憎悪の視線を背中に受けながら。もつとも、明日にはその感情も死んでいるのだろうが。

突然だが、襲撃をかける際に最も有効な時間帯を知っているだろうか？通常は夜の闇に紛れた夜襲が効果的と思われるが、それは暗殺などの場合だ。ただ単に襲撃をするだけならば、明け方が良いと言われる。

それは、何の前触れもなく始まった。

突然の揺れ、そして爆発音が施設に響き渡り、内部に警報が鳴り響いたのが始まりであった。

「な、何だ！？」

それに反応し、アスカの意識は覚醒した。しかし時間が時間であるため、本調子とは言えない。半分寝ぼけた頭で状況を確認しようと、ベルセルクを手に取った。

「おい、何が起きてる？」

『不明です。私には何も知らされて……いえ、たった今連絡が来ました。何者かの襲撃を受けたため、専用機持ちは全員迎撃に当たるようになっています。フルドライブも許可されています』

「はっ！ 隨分と焦ってるようだな、教官どもは。それで相手は？ どう局に嗅ぎつけられたか？」

アスカとしては万々歳だった。それならば適当に相手をして捕まれば良いだけのこと。

今頃、教官連中はデータの削除などで大忙しだらう。自分たちに構つている暇はないはずだ。

『敵の正体は不明です。……ただ、一つ問題が

「あん？」

『敵は、一人です。それも、抵抗した者は全員が殺害されています』

「なッ！？」

ありえない。局員ならば隊を組んでくるだろう。それに、殺害という行為をそんなに易々と行うはずがない。

『マスター、早急に移動を。現在、施設の訓練スペースは全壊。その他施設も破壊を継続しながら敵は侵攻してきます』

「…………」

もう言葉も出ない。この施設には防衛システムとして多数の傀儡兵や機械兵器が配置されている。それらを蹴散らして侵攻するなど、アスカには到底できない。

「チクショウ！何が目的なんだよ！こんなトコに来たって何もねえだろうが！」

そう言いながらもアスカは走り出した。敵がいる場所はリアルタイムでベルセルクに送られてきていた。先回りは容易い。

走ること一分半、アスカは目的地へと辿り着いた。迎撃のためか照

明は落とされ、通路には僅かに覗いた朝日しか光はない。

通路の陰に隠れたアスカは、襲撃者が通過するのを待つた。既にデバイスは展開している。先ほどから戦闘の音が続いているため、おそらく他の専用機持ちは正面から迎撃に当たっているのだろう。アスカにはそんな気は毛頭ない。どんなに魔力があるうと、最も確実に倒す方法を選ぶべきだと思っているからだ。

すると、不意に戦闘音が止まつた。

やつたのか！？

「おい、どうなった？他の連中が仕留めたのか？」

『状況確認中……把握。マスター、どうやらマスター以外の専用機持ちは全滅したようです。バイタルが確認できません』

全滅。

アスカは眩暈がした。専用機持ちは最低でもAランク相当の実力者しかいない。そして、アスカを除けば八人もいる。それを一人で片付けたのだ。尋常な相手ではない。奇襲を選んで正解であった。

専用機たちは全てがインテリジェントデバイスで、持ち主のデータを頻繁に教官たちに報告する役目がある。そして、非常時には連携が取りやすいように互いの情報をリンクさせることが可能なのだ。そのデバイスが言うのだ。間違いなく全滅したのだろう。

その時、ガツリと瓦礫を踏みしめる音が通路に響いた。

「ツ！」

動搖を押さえ込み、通路の脇にしゃがみこむ。そしてそのまま腹這いになり、切つ先を襲撃者が来ると思われる向けた。

【襲撃者が通路に現れた瞬間に攻撃する。誘導弾で牽制、その後に砲撃でノックダウンだ】

最後に人を殺してから一年、合計一年間共に戦ってきた愛機はチカチカとコアを瞬かせることで答えた。

術式を構成、スフィアを開発、準備は整った。あとは襲撃者が30メートル離れた曲がり角から出でくれば全て終わる。

そして、

通路の角から、

靴の先が僅かに見えた。

『Cross Fire』

「シユート！」

刹那、銀色の魔弾が暁を駆け抜けた。その数は五発。発射と同時に砲撃のチャージを開始する。これがアスカの必勝戦法。通路の陰に隠れようと、壁ごと貫ける。防御魔法を張ろうと防御ごと削りきる。そのような自信がアスカにはあった。

うう覚えの原作から引き出した、アスカの戦術である。

しかし、敵の次元はアスカの常識を打ち碎く。

「ウゼン」

『Spread Bullet』

それは、一発の弾丸だった。しかし、ただの弾丸ではなかつた。

銃口から放たれたそれは一瞬で拡散し、通路を緋色に染め上げる。さらに拡散した弾丸には若干ながらも誘導性能があるらしく、緩やかに曲がりながら通路の奥、つまりアスカのいる場所にばら撒かれた。

「なッ！？」

誘導弾は全てその奔流に飲み込まれ、砲撃は撃つ前にじゅうらが撃たれる。完全に出鼻を挫かれた。

『Round Shield』

咄嗟に身を縮ませ、シールドするのに必要な面積を最小限に減らす。その分、シールドの密度を上げる技法だ。

そして弾幕がアスカに迫り、

轟音が響き、シールドが軋んだ。

だが、それだけだ。シールドはその役目を見事に果たし、アスカの身を守りきつた。

「へえ、防いだかよお」

アスカの鼓膜を、賞賛の声と拍手が震わせる。

「いやあ、マジで死んだと思つたんだけじなあ？おいおい、『』の
クソ誘拐集団も中々良い教育してんじやねえかあ」

それは少年だった。容姿からして、アスカと年代はそう変わらない
だろう。

鳥のような漆黒の髪。射殺さんとばかりの鋭い目つき。嘲笑を浮か
べながら、黄金のように金色の瞳をこちらに向けている。

「で？ テメエがラストかあ？」

ギラギラと皿を輝かせながら少年が問うた。

「……あ」

勝てない。

アスカは一瞬で悟った。気迫が、一つ一つの動作が、殺意が、違
すぎる。

ここまで勝利のビジョンが浮かばない敵は始めてだった。教官相手
の模擬戦でも、状況と作戦しだいで勝てる自信はあった。

だが、この相手は教官なんかとは格が違う。

足が竦み、蹲つた体勢から立ち上がることができない。デバイスを
握る手さえも、気を抜けば力が抜けてしまいそうだ。

化け物。自然とその言葉が浮かんだ。アスカとそう変わらない歳に

しか見えないのに、全く違う生物を相手にしているとしか思えない。

その様子を見て、襲撃者の少年はあからさまにガツカリした表情になつた。

銃型デバイスのグリップで頭を搔き、溜め息を吐く。

少年のデバイスは銃身が長く、八発まで入るタイプの大型の回転式弾倉リボルが備え付けられている。フレームは全て黒く塗られた無骨なデザインだ。

「チツ、さっきのはマグレかよ。つまらねえ。専用デバイスがあるからにはそこそこ強えんだろうが、びびってるんじや話になんねえぜ」

ダルそうに肩を落とし、散歩でもするかのように少年はアスカに歩み寄つた。

そしてデバイスをアスカの額に押し当てる

「死ね、ザ～！」

引き金に手を掛けた。

刹那、

『Cross Fire』

一発の魔力弾が銃身の側面を叩き、アスカの命を救つた。

『マスター！ 退避を！』

「ツ！」

瞬間、アスカは我に返り、全速力でその場から後退した。狭い通路の中を、飛行魔法と加速魔法を併用して一気に飛び退る。

「はあ～、良いデバイス持つてんない

『Spread Bullet』

感心した様子を見せながらも、追撃の手は緩めない。先ほどの弾幕が今度は連続で放たれた。

それは、数という名の暴力だった。通路は隙間なく弾幕で埋め尽くされ、少しでも加速を緩めれば一瞬で蜂の巣だらう。もはや弾丸の壁である。

このままだと追いつかれる……！

そう判断したアスカは、負担を無視して横に伸びる通路に身を投げ出した。次の瞬間、今しがた通っていた通路を魔力弾の壁が通過する。その数の多さに、思わず冷や汗が出た。

『マスター、無事ですか？』

「……何とかな

慣性を無視したその軌道に全身が痛みを訴え、胃の中身が逆流しそうになる。それでも、死ぬよりかはマシだった。

「ベルセルク、俺はいつまで時間を稼げば良い？

もはや撃退することは諦めていた。あの少年に勝つには、自分では役者不足だ。

実力も、ステージも、何もかもが最悪だ。

『はい……およそ、十分間です。それだけあれば全員が脱出できると思われます』

十分。それは長すぎた。

今の攻防、いや、蹂躪でさえたつたの42秒。その15倍近くの時間稼ぐなど不可能だ。

しかも、こうしている間にもあの少年は接近してきている。時間がない。

身体の痛みを無視し、アスカは立ち上がった。とにかくこの場を移動しなければ命はない。

「ひうなつたら、一か八かだな」

十 十 十

「つおお～い、逃げてんじやねえぞお」

がらんとした通路を、襲撃者の少年 ライア＝アーロゲントは歩いていた。

途中にある部屋を一つ一つ確認し、逃げ遅れた人間がいれば容赦なく眉間に穴を開ける。

しかし、ライアが探しているのは逃げ遅れではなく、先ほど自分から逃げていった少年なのだ。

「アイツ、尻尾巻いて逃げやがったかあ？」

興醒めも良いところであったが、それならそれで仕事が楽になるの構いはしなかつた。

ライアの今日の仕事はあくまで『施設の破壊』であった。邪魔そうな奴は殺しても構わないと依頼主からの言葉もあつたため、田に付いた人間は皆殺しにしていく。

「でもよお、さつきの奴は中々見込みはあると思つたんだがなあ」

『魔力量、戦闘センス、ならびにデバイスの性能も田を見張るものがありましたね』

その言葉に答えるのは、彼が腰のホルダーにしまっている銃『ベロボーグ』であった。

「まあなあ。だが、アイツは駄目だあ。——で奇襲でもしてくんないかと思つて追つてみたが、全然だしい」

もつ待つことも面倒になつたライアは、広域攻撃魔法で地表ごと施設を吹つ飛ばしてやろうか、などと物騒なことを考え始めた。段々と本気でそれを考え始めた頃、突然視界が開け、広い空間に出た。

「ベロボーグ、——は？」

『はい、第一訓練場だと思われます』

「けつ、贅沢だねえ。——も訓練場があんのかよ」

とりあえず、天井と壁を破壊して次に移るついでライアがその天井を

見上げると、

莫大な量の銀色の魔力を撒き散らしながら迫るアスカの姿があつた。

十 十 十

『A . C . S . , standby』

「アクセルチャージャー起動！ストライクフレーム、展開！」

穂先に魔力刃『ストライクフレーム』を展開し、さらに一枚の魔力で編まれた翼が展開された。

アスカは現在、第二訓練場の天井付近に陣取り、ライアがやつてくるのを待っていた。既に魔力は臨界点まで圧縮されており、防御は不可能なレベルに達している。

「クッソ！原作で主人公がやつてたはずだけど、コントロールが難しそぎる…」

『敵の接近を確認、カウントダウンを開始します』

下手すれば、デバイスのフレーム」と身体が粉々になりそうなほどの魔力の奔流を制御し、その状態を保つということは容易ではなかつた。しかし、あの少年に勝つにはこれしかない。そうアスカは確信していた。

『3』

翼が脈動し、今にも飛び出せんと荒れ狂う。

『2』

ストライクフレームに魔力を限界まで注ぎ込む。

『1』

そして、乾坤一擲の覚悟を決める。

『0』

「エクセリオンバスターA・C・S、ドライブ…！」

『Ignition』

瞬間、アスカは魔力を完全に開放した。

入り口の頭上から、音すら追い越せんばかりの勢いで突進する。

それに気づいたのか、ライアがこちらを見上げた。その顔には驚きの表情がありありと浮かんでいる。

「うお！？」

『Protection Powered』

直撃の瞬間、デバイスがオートガードを発動させ、バリアでもってアスカの必殺の一撃を止めた。

しかし、

「ベルセルク！！」

『Load cartridge』

残りのカートリッジ6発を全て炸裂、バリアをストライクフレームが貫いた。この時点で勝敗は決した。ストライクフレームの先に砲撃のための魔力が集まり、必殺の砲撃が零距離で放たれる。

殺つた！！

そう、そのはずだった。

「甘えんだよ！！」

『Barrier Burst』

砲撃が発射される直前にバリアが爆発。一人はそれを諸に食らい、お互いに吹き飛んだ。

「死ねゴラアーー！」

『Rapid Bullet』

しかし、ライアは吹き飛びながらの不安定な体勢で反撃。数発の魔力弾を撃ち込んだ。

「ガアー？」

その内の一発をまともに食らったアスカは右肩を貫かれ、壁に叩きつけられた。

一方、ライアは自身を取りながら地面に落とする。

「ヤロオ、マジで死ぬかと思つたぜえ？」

至近距離で爆発を食らつたにも関わらず、ライアは余裕の足取りで倒れ伏したアスカに近づいていった。

「……ぐ、クソッ！」

「はいはい、まあお前は頑張ったと思つせえ？でもさあ、世の中にはどうにもならねえこともあるんだわ」

そして、再びライアはアスカの額に銃口を押し当てた。もう反撃する魔力も体力も残っていない。既に打つ手がなかった。

「んじや、まだ朝なんだがGood Night！」

「……知らない天井だ」

目が覚めると、アスカは見知らぬ部屋のベッドで横になっていた。白い壁、そして白い天井。部屋には他にもベッドがあり、アスカはようやく自分が病室にいるのだと理解した。

「俺は確か、撃たれたはずだ……」

アスカが覚えている最後の記憶は、額に押し当てられた銃が火を噴いた瞬間だった。

頭を魔力弾が貫いた感覚までハッキリと残っている。間違いない。自分は死んだ。

『お田覚めですか、マスター』

すると、アスカが寝ているベッドの枕元から聞きなれた電子音が響いた。

視線を向けると、そこには肌身離さず持ち歩いていたブレスレットが鎮座していた。

「ベルセルク……」

『はい』

「……スマン、何がどうなつていてるんだ？ 状況がサッパリわからん」

『はい。ここはミッドチルダの総合病院です。施設が襲撃を受けて

から、既に三日が経過しております』

「三日もだと…………って痛ッ！…」

驚きの声を上げた瞬間、右肩に激痛が走った。ライアに撃ち抜かれた傷だ。今は包帯が巻かれているが、下手に動かさない方が良いだろ？。治癒魔法があるとはいっても、完全回復には程遠い。

「ツテエー！」

『「」無理をなさらないでください。

話を続けます。あの施設は全壊、施設内に残っていた人間は全員死亡、その他は全員が管理局に捕まりました。襲撃者の少年は逃走、行方はわかりません』

「管理局だと…？」

ベルセルクの話を纏めると、逃走した施設の教官と子供たちは、『偶然にも』施設に入りしようとしていた管理局員と鉢合わせ。その場で全員が御用となつた。しかし、日取りや時間のタイミングが完璧だったことから、偶然というのはあり得ない。

『おそらく、あの襲撃犯と管理局は裏で繋がっていたのでしょうか。我々を炙り出すために、あえて囮に使つたのです』

「なるほどな」

それならば説明がつく。向かつてきた敵しか殺さず、逃亡を許すよう派手に動いていたのはそのためだったのだ。

「でもよ、それだとなんで俺は生きてこるんだ?」

『それなのですが、例の少年から伝言があります』

「伝言?」

『はい。『見逃すのは一度だけだ。次はもっと強くなつておけ』だ
そうです』

「あ?」

その他に、伝言にはあの少年の名前と数多くの罵倒が伝言され、ア
スカは思わずゲンナリしてしまひ。

「つまり、俺は敵わなかつたってことか

『はい』

「負けたな

『はい。それも圧倒的に』

「圧倒的は余計だ

『申し訳ありません。しかし事実です』

「うつせ。

……まあ、世界は広いな。あんなガキとかあり得ねえだろ』

『あり得ないといつ』とはあり得ません

「あれ？あのキャラつて何で名前だっけ？グラーニー？」

『それはあのポッチャリです』

そんな他愛もない話だったが、施設にいた頃よりも遙かに穏やかな時間が流れていった。

＋ ＋ ＋

二日前

ミッドチルダの首都『クラナガン』、そこに襲撃者の少年 ライアはいた。

建物で入り組んだ道を迷うこともなくスイスイと進み、とある一軒のボロアパートの前で足を止める。かと思いつと、そのアパートの一室に入つていった。

ここはライアが拠点としているアパートである。見た目や強度を度外視し、家賃の安さと風呂付きかどうかだけで選んだ格安物件なのだ。日照り？最寄の駅？そんなものは関係ない。値段こそが全て。それがライアの意見だった。

ここは、ライア＝アーロゲントのことを話しておこう。

彼は孤児である。しかし、両親に捨てられたとか、病氣で死んだのが原因ではない。

五歳の頃、姉が癪瘍を起こして殺してしまったのだ。

それ以来、ライアは姉の面倒を見ながらの逃亡生活と云ふ苦行のような毎日を送っている。

別に姉を恨んではない。いつかはこうなるだらうと覚悟はしていたからだ。むしろ、生まれ落ちてから五年ももつたことの方が奇跡だとすら思っている。

それからは、裏稼業で生活費を稼ぎながら細々と食いつないでいた。暗殺、護衛、盗みに破壊活動など、営業範囲の広さと成功率の点でライアは大人気となっている。稀に、管理局からも依頼が来る程だ。昔ながらの仲間が、困った時は頼りにしてこいと言つてきた時には不覚にも感動してしまったが。

「う～っす、帰ったぜえ」

「おかえり」

部屋に入ると、大変珍しいことに姉 アリス＝アーロゲントが起床していた。思わず壁に掛けてある時計を確認する。午後4時30分だった。

「……アリス、お前どおしたんだあ？今日はやけに早起きじやねえか」

信じられないかもしれないが、アリスが起床するのは午後11時だ。そこで夕食を食べた後、2～3時間ほど活動してからまた眠る。これがアリスの生活サイクルである。一日一食で睡眠時間は20時間オーバー、それがアリスである。

「気分」

「そおかよ。冷蔵庫にアイスあんぞお」

「もう食べた。歯を磨いたらまた寝る」

そう言い、スケスケの黒いネグリジェ姿のまま洗面所へと入つていった。ぶっちゃけエロい。

アリスには、人間の三大欲求である『性欲』、『食欲』、『睡眠欲』の内、睡眠欲しか存在しないらしい。腹は減らないし、異性にも興味が湧かないのだとか。

その分、一回の食事量が多い。大の男の五人前くらいを平気で胃に収める。食費が嵩むのがライアの悩みだつた。

そして、アリスの睡眠に対する執着は恐ろしい。

寝床のためならば金（ライアが稼いだ）の妥協はせず、寝ている間は防音の結界を絶対に忘れない。寝ていてる最中に起こそうものなら、それこそ命はない。両親は熟睡中のアリスを起こしたことで、家ごと消し炭にされたのだ。

良くも今まで生きていられたものだと、ライアは逆に感心してしまつた。運とは凄まじいものである。

「はあ～、前途多難だあ」

しかも、悩みはこれだけではない。

先ほどの、仕事ついでに戦つてみた少年のこともある。

アスカ＝イクシオン

「ありやあ苦労すんぞお？教授が細工した人生がまともなはずねえ。

アリシア辺りにあつたら即死すんじゃねえかあ？』

ライア『アーロゲントは神である教授からこの世界に送られた、いわば特別ゲストキャラだ。これからは、彼の人生に度々自分の仲間が立ち塞がり、あるいは補助するのだろう。それでも、ライアには彼がまともな人生を送れるとは思えなかつた。

どことなく不幸な匂いがする。

所謂、リアルラックが足りないといった感じだ。
おまけに魔法も思つていていた程使いこなせていないし、氣概も駄目。
お手上げだつた。

『彼はこれから故郷の第97管理外世界に帰還するのですか？』

「だろおな」

『それならば時期的に考えると、帰還してすぐに無印に突入することになります』

「あ～、もうそんな時期かあ」

『はい。あと三ヶ月です』

たつたの約90日だ。これだけの日数で、あの少年は戦いの運命を受け入れることができるのだろうか？

ライア個人としてもアスカが強くなつて再び戦えるのならば、それに越したことはない。それを別にしても、彼には人生を謳歌してもらわなければ困るのだ。

「ま、ルナが何とかすんだらお」

思考停止。困った時はあのリーダーに任せておけば良い。ルナは優秀だ。誰よりも上手く社会に溶け込める。だからこそ、アスカの身边に生まれ落ちるよう命ぜられたのだ。少なくとも、アリスやあの馬鹿ツインテールに任せせるのよりかは兆倍安心できる。

「まあ、元々無印は見物に徹する気だったしなあ」

『あの転生者がどのような行動をとるのか、とても興味があります』

そう、今回は戦力を総動員してまで戦う必要はない。所詮は遊びだ。死にそぐになれば、ルナが力なくで何とかするだろう。

「まあ、俺が参戦する予定の ~~s t i s~~まで生き残つていれば褒めてやるよ」

原作開始まで、残り 86 日。

第六話

「アスカ＝イクシオン。施設に監禁中、五人の子供を殺害。しかし、それは強制されてのことであり、環境を鑑みてもやむを得なかつた行為と思われる。

よつて情状酌量の余地有りとして、無罪放免とする」

それがアスカに下された判決であつた。

アスカが婆婆に戻つてから一ヶ月、裁判は比較的速やかに行われた。その間に両親に連絡が行き、管理外世界からわざわざ足を運んでくれたのだった。

殴られたが。

「クソッ、一年ぶりに会つて真つ先に殴るとか……」

『それほどマスターのことを心配していたのでしょうか』

理解はできても痛みは消えないのだった。

アスカの両親には全てが伝えられた。魔法のこと、次元世界のこと、管理局のこと、そしてアスカがどのような目に合つてきたのかも、全て。

それに一人は動搖したものの、アスカに対する態度が変わることはないかった。

「肝が太いよなあ」

『私もそう思います』

それからアスカが家に戻ったのは半月後、一月の半ばであった。家に戻るのは居候のことも相成り、実に数年ぶりのこととなる。しばらくの間は両親も仕事を休み、家族三人で実家で過ごすことになったのだった。

十 十 十

「……へえー、そんなことが」

アスカは現在、自宅の床に正座している。視線は下を向いており、良く見るとその身体は小刻みに震えている。
原因は、田の前にいる鬼だった。

「あ、あの、瑠奈さん……？」

「何でしじうか~？」

表面上はにこやかに、されど射殺すよつなプレッシャーを放つたまま瑠奈は答えた。

その姿は最後に会った時とおして様子は変わらず、肩に掛かる銀髪も蒼い瞳も変わらない。強いて言つならば背が伸びたといつゝところだらうつか?

「それで、拉致されて魔法を教わって半殺しにされて帰ってきたと

「

「い、いや、その……はい、そつです」

反論しようとするが、視線が一瞬強まつた。アスカに言論の自由は存在しないのだった。

「あ、あれだ！心配かけて悪かった！」

「……はあ～。もう良いです～。流石に虚めすぎました～」

すると、フレッシュナーが和らいだ。

溜め息を吐きながら、瑠奈は姿勢を樂にするように促す。

「まあ、今まで云々はもう結構です～。それで、アスカくんは今後どうするのですか～？」

「どうして？」

「魔法を忘れて日常に帰るのか、それとも違うのか、ということですね～」

その言葉に、アスカは窮した。

アスカの記憶が正しければ、もうじき無印が始まる。その時に、自分はどうするのだろうか。

介入はしたい。しかし、もうあんなことになるのは懲り懲りだ。怪我は嫌だし、危ないのも御免だつた。
しかし、転生した以上は介入も……。

アスカの中で、それらの思いが葛藤した。

「……それはまだ、わからない」

結局、答えは出なかつた。

「……そうですか～。それじゃあ、答えは保留といつひとで～」

すると、瑠奈はアスカが思つていたよりもアッサリと引いた。アスカは、もつと問い合わせてくるものだと思つていたため、拍子抜けだつた。

「良いのか？こんな曖昧な答えで」

「だつて決まつていないのでしょう～？それでしたら、答えが出るまで待つのです～。それに、どうせ

「え？ 何だつて？」

「いえいえ～、別に何でもあつません～」

そう言つて、瑠奈は家に帰つていつた。

『それじゃ、どうせ井田常に参加するのは決まつたようなものですね～』

自宅にある自室に戻つた瑠奈は、机にしまつてあつた小物をいつも位置に配置し、押入れに隠された装置を起動した。すると、ブウ

＋ ＋ ＋

その呟きは、誰にも聞かれることはなかつた。

ンという起動音と共に、通信が繋がる。

「それでは、定例会議を開始します～」

次元間通信装置を起動させた瑠奈の顔は、もうアスカの幼馴染の顔ではなく、教授に仕える殺戮者 ルナの顔だった。

『アイツの様子はどうだったあ？もうロータイアかあ？』

ルナの宣言に反応したのは、机の上に乗っているエアガン（の横に置いてあるスピーカー）だった。

「いえいえ～、まだ悩んでいる様子でしたね～」

『だつたら一々報告しなくて良い。結果だけがわかれれば充分』

そう苛付いた声で応えたのは、ベッドの上にある西洋人形（が手に持っているスピーカー）だった。

「ありやりや、そういうえば睡眠中でしたね～。これはすみません～

『それで？万が一、このまま彼が原作から逃げ出したらどうするんですか？』

今度は、エアガンの隣に置いてある某世纪末の拳王フイギュア（の横に 以下略）が質問してきた。

「それは無理ですね～。彼は教授から、『主人公体質』の加護を受けています～。下手すると、自殺もできませんよ～。最終回でもない時に自殺が成功する主人公なんていませんし～」

『「つ～わ～、残酷」』

と、壁に飾つてある草刈り鎌が答え、

『「もはや呪い以外の何でもないわね』

と、筆筒にある煙草のケースが皮肉げに囁き、

「それが主人公の運命です、すみません」

と、人形のような大きさの少女が曖昧に笑い、ルナの肩に飛び乗つた。

『「えー!? ジヤあ結局は戦うの?」』

弾んだ声で『S c h o l D a s』のDVDが問い合わせ、

『「う、うん、たぶん』

雪ダルマのぬいぐるみがそれに応えた。

なんとも奇怪な空間で、ルナは平然と受け答えをしてくる。そんなルナこそが、最も奇怪であった。

「どのみち彼は原作に関わります。なので、各自は対処を誤まらないように。特にアーロゲント姉弟、注意してくださいね」

『「ういーっス』

『わかつた

「よひし〜。それでは、次の報告です〜」

ルナの言葉に、皆は訝しがる。全員が、これでルナの報告は終わつたと思っていたからだ。

『まだ何かあんのかあ？』

「はい〜。これはかなり重要な案件なので、心して聞いてください

』

場が静まり返る。そして、

「どうやら、アスカ＝イクシオンの他にも転生者がいるみたいなのです〜」

さうなる沈黙が部屋を包み込んだ。

視界いっぱいに広がる無人の白い空間、そして目の前には見知らぬ男。

それらの光景を見て、男は全てを理解した。

「悪いな、こっちのミスでお前は死ん

思わず叫んでいた。

神のミスで転生するというテンプレな展開。そして繰り広げられるチートとハーレムの数々。

男は、それらのことをネットの一次創作サイトで読むのが趣味だった。家からは一歩も出ず、バイトもせずに親の収入を頼つて生きる穀潰し。親に生かされ、友人すらもいない生活に、彼はホトホト飽きていたのだ。

「あ～、やっぱりそういう反応か。まあ良い。それで、お前の想像通りに転生してもらひに」

「それじゃあ場所は『リリカルなのは』で『BLEACH』の斬魄刀の能力全部と無限の剣製と大嘘憑き（オールファイクション）と『ONE PIECE』の悪魔の実の能力全部と写輪眼と複写眼と輪廻眼と直死の魔眼と『』と『魔術の禁目録』の能力全部とニコボとナデポがあつて顔はイケメンで銀髪でオッドアイでヒロインの幼

馴染で頭も良くてチートボディで魔力量はSSSでデバイスも最強で可愛いユーナンデバイスも持つてそれから」

自分の欲望を吐き出し続ける男に、神こと教授がキレた。

「さつきから人の話を遮りやがつて、ぶつ殺すぞテメエ！」

「ええ！？」

「しかも、お前は確か今年で28だね！ が一瞬、いつの間にか口を閉じた。

ପ୍ରକାଶକ ପତ୍ର

「しかも二コボにナデボだあ？洗脳攻撃はもういらねえんだよ、この一番煎じが！」

「え、えええええ……」

男は、想像していたものとかなり違う神の態度に困惑した。

これじゃあまるで俺が悪いみたいじゃないか。

自覚もなかつた。

「…………まあ。あとでかく、お前が転生するのは確定している。世界はリリカルでマジカルな世界で良い。お前が言ったような能力特典は無理な」

「はあ！？テメエ、自分のミスで人を殺しといてサービスもできねえのか！はつ、神が聞いて呆れるぜ！」この黙田神！メガネ！使えねえ！」

「…………その代わり、テメエの転生先はかなり優遇されるようになつていい。まあ、イケメンくらいなら叶えてやるよ」

「ああ？そんなの当たり前だろ？がーむじろ、これだけかよ？チツ、マジで使えねえ」

「…………魔力量もヒロインたちと同じくらいはやる。原作に介入するも管理局アンチも好きにやれ」

「はんつ、よひやくまともになつてきたじやねえかよ。それで？他にはねえのかな？」

「…………デバイスも何だかんだで手に入るようにしてやるよ」

「ケツ、んじや、それで満足してやるよ」

そう言つて男は「マーマ」と笑い、原作に介入してクロノを、グレアムを、リーザたちを倒してヒロインのハーレムを作ることを考えるのだった、

「……………んじや、赤ん坊からやつ直すことにな
る。第一の人生を楽しんで」

「なのはは小学校までに落とすか。フホイトはプレシアから開放し
てやつてメロメロにして……くつひひひひ

もはや男は教授の言葉など聞いていなかつた。

足元に穴が開き、そこに落ちていつたことに気づいたのかすら怪
しい。

「つはははー俺が、オリ主だ!!

「死ね、死ね、死ね！あの肩が！穀潰しが！社会不適合者が！－－トが！引き籠もりが！ゴミが！社会の害悪が！紐が！虫が！厨一が！」

男が消えた後、教授はひたすらに机を殴り続けている。今の今まで我慢してきたが、流石に限界であった。

「クソッ！書類が重なっていたとかふざけやがつて－－！」

少し前に転生していつた男　　アスカ＝イクシオン。あの液体まみれの書類には、なんと他人の書類が重なっていたのだ。その影響で二人目の転生者を出す破目になつたのだった。

しかも、このことは部下たちも知らない。教授が気づいたのは、既に全員が転生先に移動していったあとだつたのだ。もう連絡はとれない。昔と違い、最近はそういうことが難しい時代なのだ。転生でさえかなり危ないというのに、神から人間に連絡などできるはずもなかつた。

「チツ、どうなるかは知らねえが、マズイことになつた。頼むぞ~、部下たち~。お前たちの『接客』に全てがかかるからな~」

祈るような気持ちで教授は呟いたのだった。

第七話

【誰か、僕の声を聞いて……力を貸して……魔法の力を……】

「……とつとう來たか」

四月もまだ始まつたばかりの頃の深夜、突然の念話にアスカは目を覚ました。

アスカは無事に小学三年生となり、学校に復学していた。長期に亘って学校を離れていたのは、家の都合により父親の実家がある海外にいたからということになつていて。そんな最中の念話であつた。

『マスター、今の念話は……』

「……放つとくぞ。俺はもう、魔法には関わらないって決めたんだ」

これがアスカの答えだった。

あんな命が幾つあっても足りないような日常に飛び込むことなど、命のやり取りを経験したアスカにはとてもではないが無理だった。よつて、原作は全てやり過げし、平穀な一生を送ろうと決心したのだ。

これには瑠奈も納得した。それならば、もうこの話題も一度としないとも言っていた。アスカは氣づかなかつたが、瑠奈はその時、含み笑いをしていたのだが。

『マスターがそう仰るのならば』

「ああ、悪いな」

その謝罪はデバイスに向けていたのか、それともまだ見ぬコーノ＝スクライアに向けていたのか。

＋ ＋ ＋

アスカは現在、瑠奈の家である北条家ではなく自宅で生活を送っている。

瑠奈がつくつた朝食を食べられなくなつことはアスカにも残念であつたが、朝から妙な寝技を掛けられることもなくなつた。しかし訓練時代の癖が抜けず、毎朝定時に起きてしまうので、どちらにしろ関係なかつたかもしねい。

出張がなくなり家に居る両親と朝食を摑つたアスカは、余裕をもつて家を出た。

「あ、アスカくん。おはようございます～

家の前に瑠奈がいた。

「早っ！？お前いつからそこにいたんだよ

「今来たばかりですよ～」

「口口口と鈴を転がすように笑う瑠奈だが、アスカは瑠奈よりも早く家を出たことがないのだった。現に今日も普段より三十分近く早く出たのだ。

「お前、実は俺のストーカーとかじゃないだろ？」「

「身の程を知れ。お前をストーキングするなど人生の無駄だ。

……まったくも〜、長年の付き合にじやないですか〜。今日は早く出てきそつだな〜と思つただけですよ〜」

即答された瑠奈の本音に、アスカは怯んだ。表情は刹那の間に能面のようになり、空氣の温度は十度くらい下がったのではなかろうか。すぐに元に戻ったが。

「わわわ、学校に参りましょ〜。今日は時間に余裕があるので、ゆっくりと登校できれいです〜」

そう言つてアスカの手を引く瑠奈は、間違つても男子には見えなかつた。

十 十 十

授業が終わり、昼休み。

終わった瞬間に席を立ち上がつた瑠奈は弁当を驚掴みしてアスカの元へ走り、自分の弁当を持ったアスカの頭を余つた手でアイアンクロー。そのまま教室を飛び出した。

「ぐつああああ〜？痛エから瑠奈さん痛エからッ〜」

そう叫ぶアスカを無視し、まるで紙でも引っ張るかのように廊下を爆走する瑠奈。その姿は既に学校の名物となっていた。そのまま屋上へと階段を上つきた瑠奈は、一番景色の見晴らしが良い席にダイブする。

「アーニャー、一瞬躊躇つてから

「あつだだだだだだ！」

人間とは思えない握力と筋力に翻弄されたアスカは、涙目で地面に蹲る。

うむ、今日も快調です。やっぱり私って天才ですね

俺は絶不調たッ！」

わかつたわかつたとばかりに手をヒラヒラと振った瑠奈は、ベンチに座つて弁当の包みを開けた。それに倣い、痛む頭を摩りながらアス力も弁当を開く。

「お前、俺に何か恨みでもあんのか？毎度毎度アイアンクローフて、普通に来れば良いじゃねえかよ」

「ん、実は、他のクラスの方なのですがね。私を昼食に誘つてくる人がいるのです」

「それがどうしたんだよ?」

「ふつちやけキモいんで来る前に退避です、」

瑠奈が猫かぶりモードで他人の悪口を言うとは。ソイツは相当にキモいのだろう、とアスカは納得した。

そう話している間に、周囲は少しずつ騒がしくなつていつた。」の

屋上は他の生徒にも人気の昼食スポットであるため、昼休みは意外と混雑するのである。

「ツゲ～」

その時、瑠奈が突然ゲンナリとした様子で肩を落とした。不思議に思ったアスカが瑠奈の視線を追つと、

そこに、絶世の美少年がいた。

金髪の髪は太陽のように輝き、一つの碧眼はまるで海のように深い。笑った顔は花が咲いたように美しく、まったく非の打ち所がない完璧な造形であった。『貴公子』、その言葉が最もしっくりくる。

「知り合いか？」

「例のキモい人です～」

瑠奈は視線をさっさと弁当に移し、食事に専念し始めた。そんなことはお構い無しに、その美少年はまっすぐにこのベンチに寄ってきた。

「やあ、瑠奈。こんな所で会うなんて奇遇だね」

「……ですね～。お久しぶりです、鷺ノ宮さん。アスカくん、紹介します～。この人は鷺ノ宮 藏人さんです～」

「……よろしく」

そう言つて蔵人はアスカを一瞥した。足から頭まで見やると蔵人はアスカを鼻で笑い、再び瑠奈に視線を移した。

「瑠奈、これから僕と一緒に食事でも……」

「結構です。私はアスカくんと食べているので。用はそれだけですよね？」

そう言つて瑠奈は屋上の反対側にある空きベンチを指差した。スマイル100%でありながら、声色は絶対零度である。

「つれないね。僕と瑠奈の仲じやないか。それに、僕のことは『クロード』と……」

「そういうことは女子に仰つた方がよろしいかと。同じクラスにすらなったことのない鷺ノ宮 蔵人さん！」

瑠奈がそう言つと、蔵人はやれやれと首を振つて去つていった。行き先は、同じく屋上で食事をとつているなのはたちのベンチである。

「……なんだ、アイツは？」

「三年一組出席番号14番『鷺ノ宮 蔵人』。成績優秀、スポーツ万能、人当たりも良く先生方の評判も上々、容姿端麗で家柄も良し。絵に描いたような完璧超人です！」

「……スゲエな」

「ちなみに、女子間で行われた『将来結婚したい男子ランキング』

では学年一位でした』

「そんなランキングやつてんのか！？』

「私はかなり低位置でしたけどね～』

「意外だな。お前つて結構良い物件だと思つんだが』

『きつと『将来結婚したい女子ランキング』で校内一位だったのが原因だと思います』

『別の意味で意外だ！？しかも校内！？』

男子には大人気の瑠奈。アスカは知らないが、瑠奈の一つ名は『女子以上に手が届かない存在』、『リアル男の娘』、『世界に一つだけの花』であった。

十 十 十

そして夜、アスカは早々に寝床に入っていた。原作に関わらないと決めてしまえば、もう気にして仕方がない。そう考えたアスカは、徹底的に無視を決め込んでいた。

【聞こえますか……？僕の声が……聞こえますか……？】

『マスター』

『無視しろ』

『了解』

阿吽の呼吸で無視を決定した主従の二人は、狸寝入りを決め込んだ。そもそも、今は魔法で戦闘を行うなど非常識にもほどがあった。アスカは現在、裁判の直後で保護観察中なのである。そんな時に騒ぎを起こすなど言語道断なのであった。

それを理解しているからこそ、ベルセルクも何も言わない。精々、管理局に通報するくらいが限度だろう。

アスカはもう原作を大筋でしか覚えていなかつた。だが、それでもここは無事に事件が解決したということくらいは覚えている。かなり曖昧で、細かいところは覚えていなかつたが。

だからこそ、二つの特大魔力を感じた瞬間に飛び起きた。

+ + +

瑠奈は日が沈んでからずつと電信柱の上にしゃがみ込み、動物病院を觀察していた。見つからないように魔法で偽装しつつ、周囲を探査魔法で監視している。

夜が更け始めると、ユーノ・スクライアが無差別念話を周囲にばら撒いた。しばらくすると、近づいてくる気配が二つ。

「アスカくんではないでしょうね~」

探査の反応があつた方向を見やると、栗色の髪の少女が一人と金髪の少年が一人。なのはと第一の転生者 蔵人であった。二人が動物病院に到着するや否や、結界が展開、その後は原作通りになのはが『レイジングハート』を起動させるはずだつた。

ユーノがデバイスを一つも持つていなければ。

「『ブレイブソウル』！セットアップ！！」

その掛け声と共に、上空を白金の柱が貫いた。直後、桜色の柱も負けじと立ち上がる。

「魔力量はほぼ同等、AAAランクの大物ですね」

光の柱がゆっくりと消え、後に残つたのはバリアジャケットを纏つた二人だつた。

なのはは原作通り、蔵人は……。

「うん？どこかで見たことあるような？」

『鍊 の騎士のデザインですね』

「ああー…どうりで赤いなーと思つたらー」

しかも、デバイスのデザインはレイジングハートとほぼ同じで、フレームが銀色なだけだつた。バリアジャケットと杖が絶望的にミスマッチしている。

「センス無いですね～」

『カオスです』

一人と一機がそう話している間に、戦闘は始まつていた。もつとも、バリアで防いで封印するだけなのだが。そのまま即終了。二人は夜

道を逃げ帰つていった。

「わざわざ、これからどうなることやら～」

『非常に先行きが心配ですね。……ツ、マスター』

「おつと、もう一人の主役が来ましたか～」

遅いですよ～と言い残し、瑠奈は夜の闇へと消えていった。

† † †

アスカが駆けつけた時、既に戦闘は終わっていた。アスファルトは碎け散り、電柱は横倒しになっている。

「クソッ、遅かったか！」

『マスター、探査魔法を使えば追いきれるかもしれません』

「……いや、良い。今日はもう帰る。これ以上ここにいるのは面倒だ。騒ぎを聞きつけて既に警察が動き始めている」

そのままアスカはそこを立ち去った。

この世界は、俺が知っている原作とは違う。

そうアスカは考えた。このままでは、いつ自分が巻き込まれるかわからない。

まだほんの僅かの違いだが、アスカ＝イクシオンという存在自体が差異そのものなのだ。何が起こつても不思議ではない。

「……ベルセルク、明日から少しほとぎす。なるべく躊躇にな
『了解しました』

こつして、アスカは無自覚のうちに事件へと関わっていくのであつ
た。

鼓動するかのように空中の魔力素が震える。平衡感覚にまで影響が出そうな莫大な魔力反応。

「来たな」

学校が終わり、瑠奈と一緒に下校していたアスカは、帰路の途中でジユエルシードの発動を察知した。

「何が来たのですか？」

「瑠奈、悪い。ちょっと行く所ができた」

そう言い残し、アスカは駆け出した。場所はおそらく神社。原作は覚えていないが、発動地点はその辺りだ。飛行魔法が使えれば良かつたのだが、街中ではそれもできない。走って向かうしかなかつた。

悪いことに、アスカの家は神社からは正反対の位置にあり、どうしても時間がかかる。魔力による身体強化を全開にしてはいたが、なのはたちよりも遅くなることは確実だった。

間に合え！

せめて、もう一人の魔導師の正体くらいは知りたい。その一心で、アスカはアスファルトを踏みしめていった。

結局、アスカが現場に着いたのは発動してから三十分後だった。その頃には既に魔力は感じられず、現場は静かになっている。

「チツ、間に合わなかつたか」

原作をほとんど覚えていないアスカでは後手に回らざるを得ない。そのため、多くの転生者が使える待ち伏せなどはできないのだつた。アスカが覚えている事件は、最初の事件、巨大樹の事件、海での事件、それから決闘だけだつた。途中で管理局が介入していた気もあるが、それも曖昧で頼りにならない。八方塞だつた。

その時、それは聞こえてきた。

「なのは、大丈夫だつたかい？」

「うん、レイジングハートが守つてくれたから」

聞こえてきたのは男女二人の声。アスカは咄嗟に物陰に隠れた。声の主の一人は間違いなく高町なのはであつた。そしてもう一人の声。それは、

「鷺ノ宮 蔵人……！？」

先日、瑠奈がキモいと言つていた蔵人であつた。あの金髪は忘れようもない。その手には青い石が握られている。偶然あの場に居合わせたとは思えなかつた。

イケメン、原作介入、デバイス、特大の魔力量、同じ学校。

これらの情報から、アスカは思い至つた。

「俺以外の、転生者……？」

しかし、それならば全て納得できる。そして、それはアスカが無理に原作に介入しなくても、物語が良い方向に向かうことを示していた。

「……そつか、なら安心だな」

アスカの心中は複雑だった。原作に介入しないと決めたものの、自分はもうこの物語には必要ないと言われたような気がしたからだ。しかし、同時に安心もしている。

『マスター、どうなさりますか？』

「……管理局に通報はした。一般人の俺にできるのはここまでだ」

アスカは踵を返し、帰路に就いた。その背中は、どこか哀愁が漂つていたのだった。

十 十 十

その後、何事もなかつたかのように日常生活は過ぎていった。

唯一あつたことといえば、数日前に街中でジュエルシードによる巨木事件が起こったことだろうか。幻覚説や宇宙人説、はたまた黒魔術説などが渦巻く中、アスカは全てを無視して過ごしている。

近々、なのはが蔵人と一緒に月村家へ行くという話を小耳に挟んだが、そんなことはアスカの人生には一片たりとも関係ないのである……！

「アスカく～ん」

連休が迫ったある日、瑠奈が普段通りののほほんとした口調で席に寄ってきた。時間は放課後、後は家に帰るだけである。

「おひ、帰るか

「です～」

そして下校。

ああ、平和つて素晴らしい。アスカがそう思った矢先だった。

「そういえば、今度の連休にウチの両親が温泉に行くらしいのです～。よろしければ一緒にどうですか～」

「温、泉……？」

瞬間、アスカの脊髄を何かが走り抜けた。戦闘で培われた第六感が、全力で警報を鳴らしている。これは、そう、敵に背後を取られた時や、武器を弾かれた瞬間に味わったような……。

「いや、俺は……」

「……あ～、そうですか～。まあ、連休は両親と一緒に過ごすべきですよね～。すみません、配慮が足りませんでした～」

そつ言つて残念そうに笑う瑠奈。罪悪感が凄まじかった。

「いや、行く。問題ない。バツチリだ」

反射的にそう答えるアスカ。一秒後には後悔したが。

「そうですか～！嬉しいです～」

先程とは打つて変わつて花のよつに笑う瑠奈に、もつ撤回はできないと悟る。もしここで断れる男がいれば、ソイツは冷血漢に違ない。アスカはここにはいない誰かに言い訳した。

＋ ＋ ＋

「温泉　温泉　おんせん」

歌詞には温泉しかないはずなのに、なぜカリズムの良い歌を口ずさむ瑠奈。何がそんなに嬉しいのだろうか？アスカには理解できなかつた。

時は連休一日目、さつそく旅館に到着した北条家 + アスカは、温泉へと直行していた。二人の背後には、大熊のような団体の巨漢がのつそりと付いてきている。北条家の亭主であり、瑠奈の父である。

温泉に行く際にあたつて、『娘を視姦したら殺すぞ』というありがたいお言葉をアスカは貰っている。娘じゃないといふアスカのツッコミは鼻で笑われてスルーされた。瑠奈のどこにこの野獣の遺伝子があるのか。謎である。そして、その隣にいるのが瑠奈の母である。おつとりとした美人で、なるほど、この女性からならば瑠奈が生まれても不思議はない。髪は一人とも黒いが。

そして温泉に到着、行き先はもちろん男湯三人、女湯一人。女湯に行けという父の言葉を父同様に鼻で笑つてスルーした瑠奈は、父の

脛を馬鹿力で蹴り飛ばし、そのまま男湯に入つていった。

ちなみに、瑠奈は本気になれば学校の机くらいならば余裕で蹴り砕けるらしい。

痛みで蹲る瑠奈の父を置いて、アスカと瑠奈は温泉へ突入した。

「おや、瑠奈じやないか！」「なんどこので会つなんて奇ぐ

即効で撤退した。

「お～う、なんか変なパツキンがタオル腰に巻いてましたよ～

「いやいや、現実逃避すんなよ

「う～～、父と母には申し訳ありませんが、もう帰りたくないつきました～」

それにはアスカも同感であったが、 そもそも行くまい。再び温泉に入した。

その後の詳しい経過は省くが、 やたらと瑠奈の身体に触ろうとしてきた勇者が、 医務室に運ばれたとだけ明記しておく。

十 十 十

深夜、良い子はもう寝る時間帯。

嫌な予感がしたアスカはなかなか睡眠できず、 布団の中で瑠奈とりとりをしていた。

「パツキン死ね、の『ね』です～」

「ね……猫？」

「殺す、の『す』です～」

「す……スズメ？」

「田玉抉るぞ、の『ぞ』です～」

「…………」

よほど頭に来ているらしい。

しかし、実際のところ、藏人の奮勇も仕方なかつたとアスカは思つ。タオルがあつても、やはり瑠奈は女子にしか見えなかつた。それと、なぜ腰ではなく身体全体を隠すようにタオルを巻くのだろうか？

「……やめよう、気が滅入る」

「そうですか～」

それっきり無言になる一人。両親は早々に寝てしまい、もう起きているのは一人だけだ。一泊したら帰る予定なため、明日は朝風呂に入つてから帰ることになつてゐる。

「……なんだか喉が渴きました～」

そう言って瑠奈はのつそりと起き上がり、財布を持って部屋を出で行こうとする。

「おい、待てよ。俺も行く。一人だと危ないかも知れないだろ」

もちろん、瑠奈を襲つたりする馬鹿がである。以前、瑠奈は痴漢を集中治療室に送つたことがあるため、笑える話ではない。医者曰く、『ダンプカーと衝突でもしたのかね?』。

一人で廊下の自販機まで行つた時だつた。

ここ数日で慣れてしまつた、魔力の鼓動をアスカは感じた。

「ツー?」

思わず発生源がある方向を睨みつける。

「どうかしたのですか? ?

「え? あ、いや、何でもない」

「む~? それなら良いので…… あ

瑠奈が驚きの声を上げる。アスカがその視線を追うと、なのはと藏人が二人で部屋を抜け出すところだつた。二人はアスカたちに気づかずに、逆方向 旅館の出口へと走つていつた。

「……行きましょう~」

「ど二へだよ?」

恐る恐る聞くアスカに、瑠奈は満面の笑みで答えた。

「あの一人の逢引を[写メで撮つて、学校中にばら撒いてやるのです」

「性格悪ツー？」

虐めつ子の発想だった。

しかし、ここに来てアスカは思い出した。そつ、これは原作にあつた出来事だ。温泉でジュエルシードが発動し、それを抑えるためになのはが動く。アスカは全力で逃げ出したかった。

「いや、そんな意地悪なことやめようぜ。恋するのは誰だつて自由だろ？」

「つは、冗談。あのパッキンの弱みを握つて、一度と学校に来れないようにしてさしあげますよ～！」

「あ、おい待てツ！！」

そのまま瑠奈は猛烈ダッシュ。一人の追跡を始めた。そのまま廊下の角を曲がり、あつという間に姿が見えなくなる。

「だあ～！クソツー行くしかねえか！」

ベルセルクは腕に付けている。普段から身に着けるといつ習慣に、今ほど感謝したことはない。

しかし、急いで後を追いかけるものの、三人の姿は一向に見つからない。どうやら完全に見失ったようだ。しかし、大声を上げて呼び

かける訳にもいかない。他の連中に見つかる。そもそも、転生者が二人だけという保障すらないのだ。危険はできるだけ避けたかった。

その時だった。

「 ッ、これは、魔力反応！？」

アスカは近くで魔力を感じ取る。おそらく、既に戦闘が始まっているのだろう。万が一、瑠奈が巻き込まれた場合を考えると、アスカは気が気ではなかった。

「 行くぞ！ ベルセルク！」

『 A11 rington』

一瞬でデバイスを展開したアスカは、空へと飛び立った。

† † †

なのはと蔵人は、原作通りにフェイト＝テスターと対決していた。

ユーノは既に使い魔のアルフと共に強制転送魔法で移動しており、状況は一対一と、蔵人たちが優位に見える。

「 で、どうあるの？」

「 話し合いで、何とかできるついで、ない？」

フェイトの問いかけに、あくまで話し合いで求めるなのは。

「私はロストロギアの欠片を、ジュエルシードを集めないといけない。そして、あなたたちと私はジュエルシードを懸けて戦う敵同士」

話は終わったとばかりに、フェイトはバイクを構える。

「だから、そういうことを簡単に決め付けないために話し合つんだらいいッ！」

「話し合つだけじゃ、言葉だけじゃ、きっと何も変わらない。伝わらなイッ！」

蔵人が叫ぶものの、それを一蹴してフェイトが一人に襲い掛かる。

田にも留まらぬ速さといつもの、蔵人となのはは思い知った。

一瞬で背後に回ったフェイトは、黒斧 バルディッシュュをなのはに一閃。危ういところで避けたなのはは、そのまま上空へと身を躍らせた。その隙を突くように、蔵人がブレイブソウルをフェイトに叩きつけるものの、同じく上空に逃げられる。

想像していたのよりもずっと速いッ！？

ここでフェイトを倒し、強さを一人に見せ付ける計画だった蔵人にとって、それは想定外のできことだった。オリ主である自分ならば、原作キャラに負けるはずなどないと高を括っていた。

そんな蔵人を置き去りにして、フェイトは上空のなのはを追い詰める。

金色の雷がなのはを襲い、

『Divine Buster』

桜色の光柱がそれを受け止める。そればかりか、なのはそのままフェイ特の砲撃を押し返した。

『Scythe Slash』

しかし、直撃の寸前に身を翻したフェイ特は、さうに上空からなのはに襲い掛かる。

「やられないと！」

蔵人が一人の間に割り込み、シールドでフェイ特を弾き飛ばす。

よし、このままいけば勝てる！

蔵人が楽観的に思った、その時だつた。

「な～に～？まだやつてるの～？」

フェイ特と全く同じで、それでも何かが決定的に違う声が森に響く。ピタリとフェイ特は動きを止め、離れた場所にいるアルフすらも身を竦ませた。

一方、蔵人たちも突然の声に驚き、動きを止めていた。

こんなものは知らない。原作には、『なんことはなかつたッ！』

中でも、藏人の焦りは最高潮に達していた。そして、フュイトの咳きが藏人を更なる混乱に陥れる。

「ね……姉さん……」

その声は怯えを帯びおり、手足が俄かに震えだす。

そして、

「はあ～い、フュイトが大好きなスペアお姉ちゃんだよ～」

声の主は唐突に現れた。空中のなのはたちをフュイトと挟むように現れた彼女を一言で表すなれば、『丘』の一言に及ぶえた。

雪よりも白い髪を一つに結い、瞳はフュイトよりもなお赤い。肌も病的に白く、左耳にはその顔に不釣合いな漆黒の眼帯をしている。フュイトと同じザインの白いバリアジャケットを纏つた彼女。腰に両手を当したその姿は年頃の少女にしては少々異常だった。

「え、えりこ、エリコ……？」

「決まってるじゃ～ん。帰りが遅いから探しにきたんだよ～！ も～、アルビノのお姉ちゃんを外出させるなんて、フュイトとアルフは悪い子だな～」

「ひつ」

悲鳴を上げるフェイト。それもそのはず。たった今までフェイトの反対側にいた彼女が、気がつくとフェイトと肩を組んでいたのだ。

「で？ どうして遅れちゃったのかにゃ～ん？」

「（ノ）～めんなさい……一すぐ！」、終わらせるからシ～」

「お姉ちゃんは理由を聞いてるんだけどな～？」

「そ、それは
」

「あ、言わなくともわかつちやつよ～お姉ちゃんはーあの子たちが邪魔したんでしょう～？」

スッとなのはと蔵人に視線を向けたスペアはニタリと笑い、

「とりあえず、あなたたちは首チヨンパで勘弁してあげるお

高々に宣言した。

十 十 十

その様子を、ジッと眺める視線が一つ。
蔵人たちが戦っている空中の遙か上空、雲に届くほどどの高高度。

『とうとう来ましたね』

「ですね～。私たちの第三の刺客、いえ、私を抜けば一番目ですね

「」

自販機で先程買ったジュースを飲みながら、傍観者 ルナは笑う。

『しかし、彼女をこんな初期に投入してもよろしかったのですか?』

『構いません。きっとお強い『主人公』が何とかしてくださいます。せっかくここまで連れてきたんですし』

とはいって、ルナも心配ではある。成長のための障害物として立ちはだかるには、彼女では強大すぎる気がしないでもない。最悪、『北条瑠奈』が介入する必要も出てくるかもしれない。

『やり過ぎないでくださいね、アリシア』

第九話

スペアと名乗る少女の登場に驚いたのは、蔵人たちだけではなかつた。木々に隠れるように様子を窺つていたアスカも、その存在に驚愕を隠せずにいた。

「何だ、 アイツは……？」

自分の記憶の穴というものは違う存在に、アスカは困惑していた。無印に、あんな少女は登場していなかつた。そう断言できる。あんな殺氣を撒き散らすような者に、いくら主人公のなのはとはい勝てるはずがない。

「あ、馬鹿ッ！」

アスカの心配を他所に、空中の蔵人は少女に踊りかかつた。敵の戦闘力がわからない今、それはあまりにも愚かな行動と言わざるを得ない。普通ならば、遠距離から様子を見るべきだろう。

蔵人は襲い掛かる途中でデバイスを変形させ、杖の先端の部分から魔力刃を伸ばした。どうやらなのはとは違い、蔵人は魔力刃による近接戦闘が主な戦法のようだ。しかしその動きは素人丸出しで、フェイトの足元にも及ばない。

「アイツ、死ぬぞ！」

気がつくと、アスカは飛び出していた。
介入は諦めた。魔法はもうウンザリ。保護観察。様々な言葉がアスカの頭に浮かんだが、

「命は一つしかねえんだよ！」

＋ ＋ ＋

新しいキャラクターが現れたからといって、蔵人は臆してなどいなかつた。むしろ、原作よりも攻略するヒロインが増えたと喜んだほどだ。この新しいヒロインも、すぐに自分の『物』になる。

「君が誰かは知らないけれど、大人しく話を聞いては……くれないんだろうね」

「もつちろ～ん 君たちをボコしてぶん取った方が早いし～？」

「それならば……仕方ないッ！」

『Saber Form』

そう言うなり、蔵人はブレイブソウルを近距離形態に変形させる。それは、槍というには刀身が長く、剣と言うには柄が長い形態であった。

白金の魔力刃を形成した蔵人は、一人に一気に肉薄した。

「破アアアアアー！！」

雄叫びを上げて迫る蔵人に対し、スペアと名乗る少女は微動だにしない。ただ、つまらなさそうに見つめるだけだ。一方、フェイトは顔を真っ青にして蔵人を見ている。

獲った！

自分の速度が速すぎるせいで、二人が反応すらできていないと勘違
いした蔵人は、そのまま刃を振り下ろす。

しかし、振り下ろした刃には、何の感触もなかつた。

不思議に思った蔵人が刀身を見やると、

魔力刃は 半ばから断ち切られていた。

「ねえ、それが全力？」

そう問い合わせるスペアは、その場から全く動いていない。否、フェ
イトと肩を組んでいない左手。何も持たないそれだけが振り切られ
たかのように地面と水平に上がっている。

「そんなツ！？」

「はい、一人脱落～」

一閃、二閃、三閃。スペアが左腕を振るう。それだけでブレイブソ
ウルは魔力刃を根元から断ち切られ、柄は中央を両断され、バリア
ジャケットは破壊された。

「ひつ」

「肉を斬つて骨も神経も斬るお～」

そして四閃目、スペアの左腕が

「つアアアアアアアア！」

蔵人に襲い掛かる寸前、足元の森から高速で飛来した何者が
が蔵人を搔つ攫つた。

「馬鹿ヤロウツ！戦いの最中にあんな余裕があつたんだぞー罷に決
まつてるだろうが！」

「な、なんだい、君は！？」

突然の乱入者 アスカの登場に、蔵人は目を白黒させた。
蔵人を抱えてなのはの所まで戻ったアスカは、蔵人を解放する。

「え、ええええ！？だ、誰！？あなたも魔法使いなの！？」

「……あ～、説明は後だ。とにかく、今は逃げるぞ。アイツらはヤ
バイ」

「待つんだ！突然出てきていきなり何を

「わからねえのか！あの白いのがその気になれば、お前はさつきの一
瞬で死んでたんだぞ！」

問答無用とばかりに一人を脇に抱えたアスカは、その場を早急に離
脱しようとする。

「あ、待つて！」

「あ、あ、？」

あまりのお気楽さに眩暈が起つていたアスカは、不機嫌を隠すこともなくなのはを睨みつける。

「ひ、あ、あの、じゅ、ジュエルシード……」

『Put out』

レイジングハートからジュエルシードを一つ取り出し、なのははファイトたちに放つた。

「勝負、私たちの負けだから」

「……やつ」

そう言つてファイトがジュエルシードを受け取つた瞬間だった。

「でもさー、君たちから」で全部奪つた方が早いお？

一瞬でアスカの前にスペアが移動していた。スペアから皆の意識が逸れた刹那の間に、スペアは瞬間移動さながらの速さで回り込んでいた。

「まず、横入りの君から」

再び無手の左腕が振るわれる。

その瞬間、超反応でアスカはスペアの腕をバインドで押さえ込んだ。

「お?」

「つづアー。」

そして、その横腹に懇親の蹴りを叩き込む。

悲鳴を上げる間もなく吹き飛んだスペアは、回り込んだフェイドに受け止められた。

その隙を逃さず、アスカは全速力で逃走する。そのまま直接旅館に戻るのは危険なため、少々迂回してから旅館に戻ったのだった。

十 十 十

旅館から少し離れた位置に降り立つた三人は、とりあえずそこで一息吐いてバリアジャケットを解除した。

「はあ、久々に死ぬかと思

」

「あああああああーー！」

「 今度は何だ！』

突然大声を出したなのはを、いい加減に限界だったアスカは容赦なく怒鳴る。

「あ、あのね、ゆ、ユーノくんが……」

「ゆーの？」

「しまつたッ！」

はて、誰だったか？蔵人となのはが焦る中、アスカは真剣に思い出せなかつた。しかし、アスカは同時に別のことを思い出した。

る、瑠奈を忘れてたああああああああああああ！－

目的を完全に忘れて戻ってきたアスカは焦つた。その時、持ち歩いていた携帯電話が場に相応しい重い音楽を奏でる。『薔薇獄 女』だつた。これは、とある個人に限定した着メロである。

「る、瑠奈！－？」

『はあ～い、そりですよ～。今どこですか～？』

「……すまん！」

三人を見失つたため先に旅館に戻つていると半分嘘を話すと、瑠奈はアッサリと信用した。しかも、途中で妙な毛色のフェレットまで拾つたという。そのまま戻つてくるらしい。

「はあ、とりあえずは一件落着だな」

「そうだね。後は君のことを話してくれれば全て解決だ」

そう言つなり、魔力でデバイスを修復した蔵人がデバイスをアスカに突きつける。

「ぐ、クロードくん－この人は助けてくれたんだよ－」

「でも、怪しいことは変わりないよ」

「あ～、とりあえず話すから落ち着け」

アスカは、自分が魔法関係者でこの世界の出身だといつことを話す。今まで助けに入らなかつたのは、保護観察中だつたため下手に戦闘ができなかつたと誤魔化す。誘拐云々は可能な限り量したが。

「そうか、だいたいのことはわかつたよ。それじゃあ、最後に一つだけ良いかな？」

そして、蔵人の顔が真剣みを帶びた。

「君は、『無印』といつ言葉に聞き覚えはあるかい？」

「…………ああ、ある。俺は映画版派だけどな」

こゝして、アスカは原作に介入することが決まった。

第十話

その後、アスカは旅館から北条家と共に帰った。ユーノとは旅館にいる間に念話で事情を話し合っている。

その結果決まったのが、『ジュエルシードが発動すれば封印を手伝う』、『ただし、日常では不干渉を貫く』、『この約束は管理局が来るまで』という三つのことだった。ただでさえ魔法とは関わりを持ちたくないアスカの、これは最大限の譲歩であつた。なのはは納得していなかつたし、蔵人に至つては必要ないとまで言つていたが。

「はあ～、憂鬱だ」

「あ、朝から溜め息とは、何があつたのですか～？」

連休明け、アスカは疲れていた。

正直に言つて、アスカからすればどうぞ三人で頑張つてくださいと言いたいところを渋々手伝つことにした、というのが本音である。次元断層が起こる可能性がなければ、こんなことは確実に無視していただろう。

「はあ～、生まれ変わつたら自由な鳥になりたい」

「そうですか～。養鶏場に行かないことを祈ります～」

そんな他愛もない話をしていると、

「あ、アスカくん！おはよー！」

「ゲッ、高町！？」

背後からなのはが声をかけてきた。

「あ、ああ、おはよー」【おー、学校では関わるなつて約束だった
だひつが】

「うふ、えつと、北条さんだよね？おはようー」【あこせつだけだ
もん】

「はー、おはよーいわこまくー。私が知らない間に仲良くなつたの
ですね~」

アスカとなのはが念話で口ソコソしている中、瑠奈は息子に友達が
できたのを喜ぶ親のような顔をしていた。

いつもして、アスカはますます原作へと底なし沼のように沈んでいく
ことになる。

十 十 十

同日、夕方。

「ん~、むつゆ~がたあ~？」

ベッドからのそっと身を起したスペアは、壁に掛けてある時計を
確認する。既に四時半を回っていた。

彼女はその体质から、日の当たる日中を部屋の中で過ごしてくる。
別に、バリアジャケットを着て紫外線を弾くように設定すれば問題

はないのだが、魔力も無限ではない。よつて、無駄な体力と魔力を使わないよう、日が沈む時間までは部屋で過ごしているのだ。

「はあ～、貧弱だよね、この身体～」

『虚弱体質なのは生まれつきです。仕方のないこと』

スペアの呟きに、男性型の電子音が応えた。その声は、彼女の枕元に置いてある蒼い宝石から漏れている。

「でもさ～、生まれに文句を言つわけじゃないけど、も～少し何とかならなかつたのかなあ～」

『スペア＝テスタークサ』。

魔力量はAランク、急激な魔力の使用が原因で寝込むこともあり、おまけに白弱体質アルビ。左目は生まれつき視力がない。さらに身体は人間として不完全で、年々身体の機能は落ち続けている。放つておけば数年ともたずに死ぬだろう。そして、このことは母親以外に知る者もいない。

「この前なんかさ～、魔法の練習で砲撃撃つたら血吐いたもんね～」

『ですね。無印の間、あの転生者たちを相手にして生き残れるのかどうか……』

スペアの相棒であるデバイス　　ロキはそれが最も気がかりであった。管理局の治療を受ければ、おそらく数年の延命はできるだろう。上手くいけば、二十歳まで生きることだって可能だ。

「あつはは、そんなの無理に決まつてゐじゃへん」

しかし、スペアは容易くそれを切り捨てる。

「こんな身体じや、魔法戦闘になんて耐えられないよ。たぶん、あの中の誰かの砲撃を食らつただけで私は死ぬ」

淡々と話すスペアは、既に死期を悟つた老人のようにも見えた。そして、それは事実であった。

特大魔法を使えば、それだけで危篤になる自信がスペアにはあった。おそらく、自分は母親よりも先に死ぬだろう。非殺傷設定だろうと何だらうと、リンクカーコアにダメージが来れば死の危険は充分に彼女にはある。そんな状態で戦闘など、自殺も同然であった。

「私の『仕事』は、転生者に有意義な人生を送らせる」と。だけど、母さんの役にも立ちたいんだ。こんななんでも娘だからね」

スペアは立ち上がり眼帯を身につけ、寝巻きから普段着に着替え始めた。その身体は痩せ細り、今にも死んでしまうのではないかと思えるほど危うい。それでも、彼女は絶対に弱音を吐かない。それは意味がないから。

「『教授』と『母さん』、どちらも大切にできるのなら、私は命くらいい捨てちゃうんだから」

そして、今日も夜が始まる。

＋ ＋ ＋

「おっはよ～、グッドモーニング」

「もう夕方だよー。」

「流石はアルフ、ナイスツッコミー。」

フェイト＝テスタロッサの使い魔　　アルフから見て、スペア＝テスターの存在は『意味不明』の一言に尽きた。

普段の生活はだらしなく、部屋は散らかり放題。ゲーム大好き、漫画大好き、アニメも某笑顔の動画も大好きという半分引き篭もり。人懐こく、煩いくらいに元気という、妹のフェイトとは真逆の存在だった。

それだからこそ、戦闘中の彼女の雰囲気は不気味としか言いようがない。

殺意、狂氣、破壊衝動、それらを訓練ですら惜しげもなく周囲に撒き散らすその様子は、もはや別人だとしか思えなかつた。日常では元気な姉、戦闘中は狂戦士^{バーサーカ}。それがアルフがスペアに抱く印象である。

フェイトとアルフは、スペアをなるべく戦闘に出したくなかった。このままでは、いつか本当に彼女は人を殺してしまう。そう思った結果だった。

「それで、フェイトは～？」

「部屋で寝てるよ。今から様子を見に行くんだ」

「あ、私も行く」

余談だが、この仮宿は広い。マンションだのうのに一階はあるし、窓は大きい。それなのに家具が少ないと、余計に部屋は広く見える。スペアなどは大量のゲーム機を持ち込んでいるためそこまでではないが、フェイトの私室は最低限の物しかない。よつて、実際に広く感じるのであった。

「あ、また食べてない」

アルフが部屋に行くと、案の定フェイトは用意した食事を食べていなかつた。

「こらないなら貰つて良いー? ちなみに返事は聞いていない!」

フェイトが返事をする前にスペアは食事を食べていた。

「ちょっとーそれはフェイトのだよ!」

「良いじゃん、本人はいらないみたいだし。それに、私つて燃費悪いんだよー」

冗談だと一笑に付したアルフだったが、実は笑えないことに事実であつた。既にスペアは、常人の数倍は食事を摂取しないとなならないほどに栄養効率が落ちていた。

「……そろそろ行こうか。次のジュエルシードの大まかな位置特定は済んでるし、あんまり母さんを待たせたくないし」

「あ、私も行こうか? もう日没だし、お姉ちゃん的にはバツチグ

「だけど」

「……ううと、平氣。お姉ちゃんは身体が弱いんだから休んでて」

「そつか~。ゴメンネ~、何かあつたら呼んでね~」

「うん」

実際、フェイトは姉を呼ぶつもりは欠片もなかつた。先日の戦闘でも、彼女は相手を殺す一歩手前まで来ていたのだ。後で聞く限りは脅しと言い張つていたが、あの眼光は確実に殺すつもりだった。

私が、頑張らないと。

自分が頑張つてジュエルシードを集めれば、母親を心配せることも、姉を危険に晒すこともない。フェイトの意思は強固だった。

† † †

なのは、蔵人、ユーノ、アスカの四人は、都市部でジュエルシードを探していた。蔵人は頑としてなのはと一緒に行動すると言ついたため、なのはと二人で行動している。

この辺にある、と大まかにはわかつても、建物と人が多いためなかなかジュエルシードは見つからない。既に日が沈み、アスカたちは門限の時間が近づいていた。

『マスター、そもそも徒歩で見つけようといつ発想そのものが間違つているのでは?』

「俺も思つけどよ、それしか方法がないだろ?広域探査は疲れるだ

けでそこまで正確に位置を割り出せないし

『では、魔力流を撃ち込み強制発動を促すのは

』

「できるか馬鹿。街中で暴走されたら意味ねえだろ。それに、ジュー
エルシードが複数あつたらどうすんだ」

やはり、地道に歩いて探すしかなかつた。

【アスカくん、私とクロードくんはそろそろ帰るけど、一緒に帰ら
ない? ユーノくんはしばらく残るつて言つてるけど】

なのはからの念話に、アスカは携帯電話で時間を確認した。確かに、
もう七時を回つている。

【やうだな、そろそろ帰るか。今どこだ?】

合流地点を決め、途中までは一緒に帰ることになつた。そして、ア
スカが移動を始めた時である。

空が陰つた。

街が暗くなつた瞬間、雷鳴が轟き、魔力流が発生した。疑いよつも
なく、フェイトたちの仕業であろう。

「なッ! ? アイツら、こんな街中で強制発動させる気かよ! ?

すると、ユーノが機転を利かせたのだろう。結界が張られ、街を隔
離した。

【ナイスだ、ユーノ!】

【うん、でも、ジュエルシードが!】

【やつちは任せー!】

【僕となのはが封印するー!】

すると、アスカは三箇所から巨大な魔力を感じた。フェイントを含めた三人が、封印魔法を使ったのだろう。

「はあ、とりあえずは安心か」

アスカの最後の心配は先日のスペアだけだったが、それに關しては心配していなかつた。

「出てこいや、いるんだろ?」

一人咳くアスカ。しかし、それに反応する者がいた。

「……どうしてわかつたの?」

近くの車の陰から出てきたのは、スペアだつた。バリアジャケットを纏い、前回と同じ無手。それなのに、アスカにはそれが戦闘準備を完了しているとわかつた。

「おいおい、そんなに殺氣を駄々漏れにしてたら嫌でもわかるつての」

アスカもデバイスを展開し、バリアジャケットを纏う。

「で？俺はジュエルシードなんて持つてないぜ？それでも闘んのか？」

「ふふふ、だいじょぶ」

スペアは不適に笑い、

「足止めでじゅうぶんだもん！」

アスカはスペアに突撃した。

† † †

正直なところ、侮っていたとしか言い様がなかつた。蔵人を無手で斬つていた光景から、何か特殊な魔法で攻撃をしてくるタイプだと思っていた。しかし、槍を用いての攻防で悟つた。

あれは、幻術で得物を不可視にしている。

片手で扱つているところから刀剣の類かとも思つたが、リーチの長さから考えて長物である可能性もある。まったくもつて奇怪な戦法であつた。

近接戦じゃ埒が明かない！

アスカは一旦距離を取り、遠距離戦で様子を見るべしだと判断した。敢えて大振りの攻撃でスペアを引き離したアスカは、流れるような

動作で魔力弾を発射する。

『Cross Fire』

「シユートー！」

発射するのは三発、しかし、それとタイミングを僅かにずらして再び三発を発射する。しかし、それはスペアの不可視のデバイスに容易に切り戻され、避けられた。

「テメエ、いつたいどんな武器を使つてやがるー！」

「さあ？剣か、槍か、斧か、ひょっとしたら弓かもよ？」

「どこの騎士王だ！」

『Divine Buster』

話している間に魔力をチャージ、そして発射。銀色の砲撃がスペアを飲み込んだ。

「やつたか！？」

「やつてない！」

いつの間にか背後に回りこんだスペアは、その左腕を振り下ろす。防御魔法を展開する時間がなかったアスカは、咄嗟にベルセルクを受け止めた。

右肩に激痛が走る。

「ツ~~~~~！」

「お、流石おつとこのこへ 声を上げなかつたのは褒めてあげる~」

アスカは、確かに攻撃を受け止めた。ベルセルクを持つ手にも、手応えは確かにあつた。それなのに、なぜアスカの肩に痛みが走ったのか。

「クッソー！ そいいや、お前はフェイトの姉だつたな！ その得物、『鎌』だろー！」

「（）答へ…」

『鎌』、柄に直角に刃を取り付けられた異形の武器。元々は農具であつたそれは、武器としての能力は低いと言われる。なぜなら、鎌で物を切断するには、振つて引くという一つの動作が必要だからである。それならば、一つの動作で使える剣や槍の方が遙かに使いやすい。

しかし、鎌、特に大鎌は、使い慣れれば恐ろしい能力を發揮する。それがアスカを襲つた縦横からの刺突である。

無理やりに下がり、スペアと距離を離したアスカは肩が抉られていなきことに気づいた。どうやら、バリアジャケットに救われたらしい。

今の一撃で右肩には痛手を負つたが、その分、得るものもあつた。

「わかつたぜ、お前の正体！ お前は大鎌の幻術使い！ 高速移動は幻影だ！ それに、今の一撃で得物の長さも理解した！ もう見えない鎌に惑わされることもねえ！」

フェイトの姉なのだから高速移動はできて当然、その前提に騙されていた。実際は、スペアは幻術を駆使して地道に攻める技巧派魔導師だったのだ。

「うーん、75点かなあ？一応は合格…………はあー、本当のアリシアの身体だったらこんなセコセコした戦い方しなくても良いんだけどね～」

最後の方の呟きは聞こえなかつたが、それでもアスカはスペアの戦術の大方向を見切つた。

その時だつた。

急に周囲が明るくなつたかと思つと、爆音と共に凄まじい衝撃が一人を襲つ。

「何だッ！？」

「隙ありやあああああーー！」

爆発に気を取られた隙に、アスカはドロップキックを顔面に食らう。向かいのビルまでアスカを蹴り飛ばすと、スペアはそのまま転送魔法で去つていった。

「今度は本気出すもんね！」

捨て台詞を残して。

第十一話

「げつは、もう最悪！」

フェイトたちよりも一足先にマンションに戻ったスペアだったが、先程の戦闘だけでかなりのダメージが身体にきていたらしい。戻つてくるなり、洗面所で血反吐を吐くことになった。

「うえ～、これ消臭しないとアルフに気づかれるし……本当に最悪」その程度ならば魔法で簡単にできるものの、そのためには再び魔力を使って身体を痛めつける必要があるという悪循環であった。

「あ～、こんな粗末な身体になるなんて、なんといつ不幸」

「それはあなたを造った母親に言つてください」

音もなくスペアの背後に立つたのは瑠奈であった。気配もなく不法侵入をしてきたことにスペアは一瞬驚くものの、すぐに平静を取り戻す。

「ルナ～、暇なら消臭やつてよ～。私には時間も魔力もないんだし」「

「はいはい～」

手際良く消臭の魔法を使った瑠奈はスペアを抱えると、そのままベ

ツドへと運んだ。振動を与えないようにひたすらと寝かせると、治癒魔法を使ってスペアを修復する。

「あ～～、効く効く～。ルルがルナのこと好きなのもわかる気がする～」

「便利アイテム扱いされても嬉しくありませんよ～」

苦笑しながら治療する瑠奈だが、スペアはみると顔色を良くしていくのだった。

「それで～？無印くらいは生き延びれそうですか～？」

「なんとか～。でも、砲撃でも食らおうものなら軽く死ねる～」

「ふつ、ヘボいですね～」

「あ、鼻で笑った！」

命がかかつている会話とは思えないほどの軽い口調だが、一人からすれば真剣そのものなのである。他の人間が見ればそうだとは思えないだろうが。

「アリシア、あなただって忘れてるわけじゃないでしょ～～？私はちこは、『弱体化ルール』がかかってるんですよ～～？舐めてかかる、先に原作キャラに討ち取られます～」

「わかつてゐよ～」

『弱体化ルール』、それはルナたちに科せられた縛りである。

通常、彼らが本調子で転生すれば、それこそ一騎当千の強者となるだろう。しかし、それでは万に一つも転生者には勝ち目がない。ある程度成長してしまえば、手加減だつて見破られるようになるだろう。

そこで、神の使徒限定の『弱体化ルール』が登場した。
そのルールは複数ある。

一つ、全員の『亞流ベルカ式』の使用禁止。

この時点で、彼らは全力の発揮が不可能となつた。ライアやアリシアはミッド式に変更している。

二つ、数名の特化能力や稀少技能レアスキルの封印。

既にスペアには幻術特化の特性はなく、ライアやアリスに至つては稀少技能すら残つていない。

三つ、一部の凶悪で殺傷率の高い魔法の使用制限。
スペアはこれで大部分の魔法が使用禁止となつた。使おうとしても、その使用方法が思い出せないのだ。

「そうなつたら、私に残つているのは身を隠すのと幻影シルエットだけ。あと
は精々クロスレンジ」

「無理ゲーですね~」

「でしょ~? 電気技を封じられたピカ ュー並みに無力だよ~」

「でも、それが実際の幻術使いの限界ですよ~。認識阻害なんて狂つた次元に到達すること 자체がおかしかつたのです~」

手早く応急処置を終えた瑠奈は、近づいてくる魔力を感じ取った。どうやらフロイトたちが戻ってきたらしい。

「それでは、私は帰ります。家でリリスが待っているのです」

「あ、そっか。リリスって今そっちの家に居るんだよね。元気にしてる~？」

「人形のふりをして私のベッドで過ごします。時々アウトフレームを開いて散歩に出かけています」

「散り散りになつている彼らだが、それでも互いの心配はしていない。こういう『仕事』は初めてではないからだ」

「あ、そつそう。アリシア、大好きな母親と会えて嬉しいのはわかりますが、公私はしっかり分けてくださいね~?もし、プライベートに天秤が傾きすぎたら、その時は」

「私はあなたを殺さなければなりません~。

帰り際、瑠奈はそう言い残して去つていった。

† † †

「なぜ!貴様は昨日来なかつた!」

アスカが学校に登校するや否や、廊下で会つた蔵人が掴みかかってきた。どうやら、昨日の発動の時に来なかつたことを言つてゐるら

しい。

「だから、昨日も言つただる。あの白このに襲われたんだよ」

「それがどうしたー。わざと倒して、ヒカルに来れば良かっただろ！」

蔵人のそれは、まるで子供の駄々であった。無理難題である。

「お前、そんなの無理に決まってるだろ？が。アイツ、かなり強かつたんだぞ？それに、アイツだって転生者かもしれないんだ。慎重に対処するべきなのはわかるだろ？」

「そんな言い訳が通用するとでも思つてゐるのか？いや、そもそも君は本当に彼女と戦つたのか？」

「はあ？」

「やうか、わかつたぞー。君は逃げたんだ！僕が華麗にジュエルシードを封印するところを見るのに嫉妬して逃げ出したんだ！」

「……何言つてんのお前？」

ユーノから聞いた話だと、暴走して爆発したジュエルシードは蔵人が封印したのだと言う。しかも、何を考えているのか、それをフェイトに譲つてしまつたらしい。

「本来ならば、君が封印するはずだつたんだ。受け取つてくれ」

とか言つていたのだとか。

本人はフェイントに好印象を持たれたいがためにした行為なのだろう。

そのおかげで、フェイントは原作と違った怪我をしていない。

しかし、それが実に愚かな行為だと彼は気づいているのだろうか？

何のためにレイジングハートは破損したのか、わかったものではない。

「君がいれば、レイジングハートが壊れることはなかつた。あれは君の責任だ！ そのせいで、なのははショックを受けて元気がなかつたんだぞ！」

「いや、近くにいたくせに何もしなかつた奴に言われたくないんだが」

「何だとおーー！」

「それに、あのデバイスには自動修復機能があつただろ？ なら明日には直るんだから良いじゃねえかよ」

「お前！」

蔵人はついに腕を振り上げ、アスカに殴りかかる。

「こらー！ 何をしているのー！」

しかし、運良くそこに担任の教師が現れ、蔵人は取り押さえられた。そのまま職員室へと連行されていく。もちろん、アスカも一緒に連れて行かれたのだが。

＋ ＋ ＋

「朝から職員室とは、青春しますね～」

「じてねえよ」

昼休み、アスカと瑠奈はいつもの場所で昼食をしていた。話題は、もちろん朝の騒動である。

「結局、何が原因なのですか～？」

「……まあ、色々あつてな」

話を曖昧にするアスカだったが、瑠奈は追求しない。アスカにうて、瑠奈は最高の聞き手だった。

「何にせよ、仲直りはさせられたのでしょうか～？だったら、後は放つておけば何とかなりますよ～」

「そうだな」

「どうせあのパッキンが難癖つけてきたのでしょうし、気にする必要はありません～」

教室はその話題で持ちきりで、他の生徒は大体が一方的にアスカが悪いと言つ中、瑠奈だけはそう言わない。

転校してきたばかりで、更に言つなら瑠奈以外とは付き合いの良くないアスカ。社交的で生徒の人気もある蔵人。どちらが悪く見られるのかは明白である。

「はあ～、裁判だつたら即効でストレート負けだつただろうな」

「大丈夫、その時は私が弁護してあげますから～」

「……そりや安心だ」

＋ ＋ ＋

【君は来なくて良い】

夕方、ジュエルシードの発動を感じたアスカは、蔵人からの念話に耳を疑つた。

【はあ？ なんでだよ？】

【君なんかがいなくても、僕となのはで充分に対処できる。むしろ、仲間のことを考えずに逃げ出すような奴がいては足手まといだ】

何言つてんだコイツ？

それがアスカがまず思つたことだつた。どうやら朝の件を未だに引き摺つてゐるらしい。いや、根に持つてゐるといつたところだろうか。

【高町も納得してんのか？】

【当然さ。だから、無関係な一般人はさっさと家に帰りたまえ】

実際は、蔵人が勝手に言つてることなのであるが、そんなことはアスカが知るはずもない。それきり、蔵人は念話を断つてしまつた。

「何考えてんだか」

二人でできると言つならば止めはしない。むしろ、アスカからすれば厄介事が減つて大助かりだった。

「あの白フェイトが出てきたら厳しいだろうが……まあ、何とかなるだろ」

＋ ＋ ＋

蔵人の宣言通り、ジュエルシードは比較的速やかに封印された。蔵人、なのは、フェイトの三人が砲撃を放ち、押し潰されるかのように暴走体が消滅する。

そして、宙に浮かび上がったジュエルシード。それを見て、蔵人はクロノが現れるのを待つた。

幸いにも、今日はスペアは来ていない。この前のように油断が原因で負けることもない。

よしー良いぞーここでクロノを倒して、リンクティを論破すれば、なのはは僕にメロメロだ！

予定としては、フェイトに攻撃しようとしたそれを蔵人が守り、そのままクロノを圧倒して倒す。攻撃の理由は、怪しい黒服からフェイトを守るためにといった理由にするつもりだった。

そして、二人がデバイスを振りかぶり、激突した。

瞬間、転送魔法でクロノが現れる。

「ストップだ！」この戦闘は危険すぎる！

時空管理局、クロノ＝ハラオウンだ！詳しい事情を聞かせてもらひつ

バルディッシュをデバイス
S2Uで、レイジングハートを素
手で止める少年。

手で止める少年。

思わずプレイブハートを握る手に力が入る。既に邪魔な転生者は排除した。つまり、ここからは藏人のための舞台。

僕が！ オリ主だああああああああ！ ！

上空から降り注ぐ魔力弾。ジュエルシードを奪おうと手を伸ばすフエイト。それを妨害しようと魔力弾を放つクロノ。

「フェイト、危ない！！」

それをシールドで防ぐ蔵人。

「君！そこを退くんだ！」

「うるさい！君こそ何なんだ！突然現れて、何様のつもりだ！」

「なッ！？」

驚くクロノに気を良くした藏人は、そのまま反撃に転じる。お返しとばかりに魔力弾を発射し、クロノを追い払った。

「フロイト、今のうちに逃げるんだ！」

「え、え？」

フロイトからすれば、なぜ自分が助けられているのかがわからない。悪いのは確実に自分であり、更に言つなら、敵である蔵人が自分を守つたのだ。理解不能であった。

【フロイトー早く撤退するよー】

その声にハツとしたフロイトは、急いでジュエルシードをデバイスに格納し、アルフ共々転送魔法で去っていく。

「ツ！待つんだ！」

「行かせない！」

クロノが追おうとするが、またしても蔵人が邪魔をする。

「クローデー彼は敵じゃない！時空管理局は

「うるさいー」

『Saber Form』

ユーノの言葉を無視し、蔵人はクロノに襲い掛かる。クロノからすれば、こんな素人丸出しの弱小魔導師くらい簡単に制圧できるが、無駄に戦闘をせずに停止させたい。よつて、一時的に防戦一方になつていた。

しかし、蔵人はそんなことは関係ない。防御魔法しか使わないクロノを見て取り、自分が優勢であると錯覚した。ここでクロノを倒す。それしか頭になかった。

「食らえ！」

無駄に魔力だけは込めた魔力刃を振り上げ、クロノが張った防御魔法に渾身の力で叩きつける。

「クッ！待て！話を聞くんだ！」

「うああああああああああああああ！」

クロノの静止を振り切り、蔵人は更に魔力を込める。そして、**防御**魔法に限界が訪れ、ピシリと鱗が入った時だった。

「はい、アウト。公務執行妨害で制圧するから」

スパーク音と共に、凄まじい衝撃が戦人を叩き潰す。

「ぐああ！」

「動かないで。これ以上抵抗したら本当に逮捕するわよ？」

ブレイブハートは蹴り飛ばされ、既に手が届かない。手足は茜色のバインドで拘束され、身動き一つできなかつた。うつ伏せの状態で完全に拘束された蔵人は、声の主を見ることすらできない。

「く、クロードくん！？」

「こ、これは彼が悪いのよ？待てと言ったのに聞かないんだから」

なのはの心配する声が聞こえたが、声の主が一蹴する。

「落ち着いた？大人しくするなら開放しても良いわよ？」

その言葉に、蔵人は渋々頷く。するとバインドが解除された。

「く、つ、いつたい何だ！」

立ち上がった蔵人が振り返ると、表情が固まった。目の前の少女に目を奪われたのだ。

プラチナブロンドの髪はポニーテールになつており、風にサラサラと波打つた。紫苑のキツイ眼差しは気の強さを感じさせる鋭さがある。しかし、最も目を引くのは、異常になままでに重装甲なバリエジヤケットと巨大なデバイスだった。

漆黒の鎧は、原作で見たどの騎士よりも厚く、重そうに見える。その手に持つ黒斧の柄の大長さに至つては、2メートルを超えていた。それに見合つだけの巨大な刃は、殺人的なまでに攻撃的なフォルムをしている。装甲と斧、二つの重さを合計したら、いつたいどれだけになるのか想像できない。

「それで、事情を聞かせてもらえたってことで良いのね？」

「え、あ、はい」

呆然とする藏人と会話することを早々に諦めた少女は、その横にいるなのはに問いかけた。それに、なのはがたどたどしく返事をする。

『一人とも、お疲れ様』

すると、空中にモニターが開き、翡翠の髪の女性が顔を出した。次元航行艦『アースラ』艦長のリンティ＝ハラオウンである。

「すみません、片方は逃がしてしまいました」

『うーん、まあ、大丈夫よ。でね、ちょっと話を聞きたいから、そつちの子たちをアースラに案内してくれないかしら?』

「了解です。すぐに戻ります」

モニターが閉じ、少女とクロノが振り返る。

「それじゃあ、あなたたち三人には』同行を願うんだけど」

「は、はあ」

「わかりました。ほら、クロード」

「……え、あ、ああ。わかつたよ」

そして、転送の準備を始めるクロノ。

「あ、あの」

その時、なのはがおずおずと手を上げた。

「ん? 何だい?」

「あの、あなたの名前……」

その視線は、黒斧の少女に向いていた。

「私? ああ、まだ名乗ってなかつたわね」

肩に担いだ斧を地面に突き立て、少女は名乗つた。

「時空管理局、執務官補佐のイーテア＝グレイスよ。よろしく

「……どうしてこうなった」

アスカは現在、アースラの茶室にいた。例の似非ジャパンである。自宅で宿題をしていたアスカは、なのはからの突然の連絡で発動の現場に呼び出されたのだ。多少は怪しんだものの、言われた通りに向かつたアスカは、そのままクロノたちに連れられて転送、あれよあれよという間にここに来ていたのだった。

「ごめんな。この人たちが、アスカくんにも話を聞きたいからって……」

「……そういうとか。お前たちはもう聞いたのか？」

「まだだよ」

つまり、これから原作での会話が始まるらしい。アスカは憂鬱になつた。来る途中でユーノに聞いた話だと、また藏人は馬鹿な真似をしていたらしい。おまけに、そのまま取り押さえられたのだとか。

その後、既に变身を解いたユーノを含めた四人での事情聴取が始まつた。といつても、原作通りのかなり軽いものだつたが。

「これより、ロストロギア『ジュエルシード』の回収については、時空管理局が全権を持ちます」

「えつ」

「君たちは、今回のことは忘れてそれぞれの世界に戻つて、元通りに暮らすと良い」

驚くのはヨーノだが、原作を知る蔵人と、ある程度の予想をしていたアスカは驚かない。

「で、でも、そんな……」

「次元干渉に関わる事件だ。民間人が介入するレベルの話じゃない

「そういうこと。餅は餅屋つことだから、手出しあり出しも無用よ」

「でも……！」

「まあ、急に言われても気持ちの整理がつかないでしょう。今夜一晩、ゆっくり考えて、四人で話し合つて、それから改めてお話をしましょう」

「待つてください。それはおかしくありませんか？」

リンディの言葉に、蔵人が待つたをかけた。アスカの予想通りである。

きっと、蔵人はここでリンディの言葉の裏を読み取つて良い格好をするつもりなのだろう。

「なぜ、僕たちに話し合つ猶予などをして貰えるのですか？邪魔ならば一言、介入するなで終わりで良いはず。まさかとは思いますが、僕たちを引き入れるつもりですか？」

「なに！」

「クロノ、落ち着いて」

その言葉にクロノがいきり立つが、イデアがそれを諫めた。

「鷺ノ宮くんだつたかしら？あなたは何が言いたいの？」

「つまりとこる、あなたたちは僕たちを必要ないと言いながらも、結局は利用するつもりなんでしょう？違いますか？何せ、AAAの魔導師が一人もいるんです。戦力としては充分に使える」

蔵人の言つたことは、アスカも薄々は思つていたことである。本当に介入させたくないなら、話し合いなどさせる必要はない。蔵人の言葉になのはとユーノが慌てる中、アスカは黙つて状況を見守つた。

「……そう聞こえてしまつたなら、謝罪しま」

「なに調子に乗つてゐるの？」

重い沈黙の中、リンディが謝罪の言葉を言おうとした。しかし、それをイデアが遮る。

「馬鹿じゃないの？自分たちが必要だと思つてるとか、どれだけ自分に自信があるのよ」

皆が唖然とする中、凍えるような目でイデアは淡々と話す。腹立た

しいと、不快だと目が語つていた。

「良い？あなたたちは確かに使えるわ。AAA魔導師が一人に、優秀な結界魔導師が一人、それと場慣れしてのも一人つてね」

「イデア」

「黙つてクロノ」

今度はクロノがイデアを諫めるが、それをイデアは一蹴した。リンディは何も言わずに、状況を静観してる。

今言つていた場慣れしている者とは、おそらくアスカのことだ。なのはから名前を聞いた後、すぐに調べたのだろう。いや、この世界の事件という時点で先に調べていたのかも知れない。

イデアはなのは、蔵人、ユーノ、アスカの順に見回し、鼻で笑う。

「はつきり言うわ。あなたたち四人分の働きくらい、私一人で充分にできる。スクライアくんとイクシオンくんはできれば欲しいところだけど、残りの二人は論外。魔導師経験が一ヶ月の素人なんか、いるだけ足手まといよ」

「なんだと！？」

「それとも何？鷺ノ富くんはプロの魔導師よりも、自分が役に立つとでも思つてるわけ？自信過剰も大概にしておきなさい」

「それじゃあ、どうしてリンクティさんはあんなことを言つたんだ！」

苦し紛れと言わんばかりの反撃をする。しかし、それすらもイデア

は予想していたかのよに答える。

「頭ごなしに関わるのを禁止しても、無理やり戻つてくるかもしれないからよ。『この事件は僕たちが解決しようとしていたんだ』とか言われて突然来られたら迷惑でしょ？』』で全部答えを出してくれると助かるのよ」

そうすれば、トイデアは付け加えた。

「勝手に事件に関わった時点での公務執行妨害であなたたちを堂々とぶつ飛ばせるわ」

ペロリと唇を舐めるその仕草は、むしろそういうことを望んでいるようだった。

＋ ＋ ＋

「……すまないな」

転送ポートまで送ってくれたクロノは、転送前に謝罪をしてきた。

「彼女 イデアにも、悪気があるわけじゃないんだ。ただ、何かが起つてからでは遅い。君たちを危険な目に遭わせないために、あえてあんな風に言つたんだよ」

『……はい』

クロノの言葉に、全員が頷く。実際、イデアが言つていたことは正論だ。

彼女が何者なのかはわからないが、悪い人物ではないのだろう。時

には厳しく言わないと言じないと通じない」とだつてあるのだ。

言われた当人は全く反省していないことだつたが。

「とにかく、慎重に話し合つて答えを出してくれ。中途半端な気持ちで関わると、痛い目を見るかもしれないからね。ああ、それとイクシオン」

最後にクロノに呼び止められた。話してへこことなのか、なのはたちと距離をとつてから小声で話し出す。

「わかつていろと思ひうが、君は保護観察中だ。下手に関わるのは不得策じゃない」

「……わかつています」

「だが、覚悟を持つて関わるところのなれば、僕たちは全力で君に協力する。嘱託魔導師として解決に尽力すれば、保護観察の期間も短くなるだひつ」

「…………あらがとうござります」

それを最後に聞いて、アスカたちは地球へと戻ったのだった。

† † †

「あらがとうござります」

夜、帰ってきたフェイトから今日あつたことをスペアは聞いていた。どうやらどう时空管理局が来て、おまけに執務官まで出てきた

うじい。

「それで、これからどうするのさ？」

「もう駄目だよ！ 時空管理局まで出てきたんじゃ、もうどうにもならないよ。逃げようよ、二人でどうかにゃ」

その選択は、スペアにとつては愚策でしかない。母親の役に立つこともできず、延命すらもできないで死ぬだけだ。それならば、玉砕覚悟で戦つた方がスペアにとつてはマシだった。

原作と違い、フェイトはそこまでの虐待を受けていない。スペアがのらりくらりとプレシアと会わせるのを回避しているからだ。その分、親子での関係は原作以上に疎遠になつたとも言える。フェイトのプレシアへの依存は変わらないが。

そして、スペア自身もプレシアからは嫌われている。フェイトの一号機として造つたアリシアモデルのクローランであるにも関わらず、記憶しか再現できなかつた、まさにフェイトとは真逆の存在。すぐに死んでしまうアリシアなど、プレシアが認めるはずがなかつた。『記憶を消去された一號機』は、改竄された記憶によつてフェイトの双子の姉となつた。

つまり、実際は私は妹なのだ。

なぜプレシアが姉として設定したのかはわからないが、スペアは特に気にしなかつた。

既に、スペアは『生前のアリシア』の記憶がかなり薄れている。前世の記憶がなければ、とつぐに忘れていただろう。

「でも、逃げた後は必ずあるの、結局、一生逃亡生活なんだよ?」

「それは…………でも、相手は一流の魔導師だ!本気で捜査されたら、ここにまでバレずにいるられるか?……」

「…………でも、私、母さんの願いを叶えてあげたいの。母さんのためだけじゃなくて、きっと自分のため」

フロイトの言葉に、スペアは目を細めた。その言葉の中には、本当に自分などは全く入っていないことづつこころからである。

「…………はあー、アザロンもここまで来れば天晴れだね」

スペアは、フロイトの頭をグリグリと撫でた。乱暴な撫で方に、『アリシア』と同じ金色の髪がクシャクシャと乱れる。

「ね、姉さん…………?」

「お~け~お~け~、わかつたよ。これから全部が終わるまで、昼間には私も出る」

その言葉に、フロイトとアルフは驚愕する。それは、一步間違えば、バリアジャケットが壊れれば文字通り死の危険があるのだ。それをスペアはやると聞いた。相当の覚悟が必要なはずのことを簡単に言いつけていたのだ。

「駄目だよ姉さん!」

「やつだよーそこまでしなくとも

「

「そこまでしなくちゃ、本当に捕まるよ？母さんのために頑張るんでしょ～？だつたら、お姉ちゃんも頑張るしかないじゃ～ん」

二人は押し黙つた。確かに、今は猫の手でも借りたいのだ。人手が増えるのはありがたい。しかし、心配なものは心配だつた。

「……約束して姉さん。戦闘はしないで、探索だけしかしないって」

「なんでさッ！？私の方がフェイトよりも強いよー！」

「馬鹿なこと言つてんじやないよーもし戦闘になつたら、ひ弱なアントタジや一撃で墜とされるだろー！」

「当たらなければどうとかいふことはないッ！…」

その後、フェイトとアルフの必死の説得により、戦闘行動はしないとこう約束をさせられたスペアであつた。

† † †

「う～、私つてそんなに信用できないかな～？」

疲れて眠つてしまつたフェイトの頬を突付きながらスペアは張れていった。ハムスターのように頬を膨らませている。

その時、ふと気配を感じたスペアは一瞬でデバイスを展開。背後にいる何者かに背を向けたまま鎌を突き立てた。アルフは今コンビニに出かけているし、こんなに気配を薄くしたりはしない。

「誰？三秒で答えないと殺すよ？」

「……あなたも甘くなつたわね」

久しぶりに聞いたその声に、スペアは力を抜いた。
デバイスを解除し、その人物に向き直る。

「イデア！久しぶり～」

そこにいたのはイデアだった。

アスカたちが会つた時とは違い、その口には煙管^{チヤル}を銜えている。

「脅かさないでよ～。危つく殺すところだつたよ～」

「嘘吐きなさい。殺氣がなかつたわよ？前のあなただつたら問答無用で殺していたでしょ？」

イデアが煙を吐きながら問いかける。

「ふふふ、妹の教育に悪いからですよ～？」

それに答えたのは、スペアではない第三者だった。部屋の暗がりから現れたのは、先日と同じように不法侵入した瑠奈である。

「あらルナ、久しぶり。変わらないわね、あなたは」

「そうですか～？自分ではかなり変わつたつもりですよ～？例えば、正月に振袖を着せられても気にならなくなりました～」

「……そう、なんか悪かったわね」

「気まずそうにするイデアが再び煙を吐くと、紫煙は風もないというのに開かれた窓から出て行った。

「それで? アリシアはかなり具合が悪そうだけど、大丈夫なの?」

「だいじょぶ、無印が終わるまでは。その後は知へらない」

「あつそ。ならいつそのこと、無印の間に葬つてあげる?」

「うわ~お、正義の管理局員様がそんなことを言つてよろしいのですか~?」

「大丈夫よ。流れ弾が何かに当たつて弾かれて、それが当たつて死ぬだけだもの。偶然つて怖いわよね」

「この世に偶然なんてない! あるのは必然だけなのだ~!」

「じゃあ、あなたは死ぬべくして死ぬのよ」

これほど騒がしいといふのにフュイトが目を覚まさないのは、イデアがフュイトの周囲にだけ防音結界を張つていてるからである。

「それで、真面目な話どうなの? あなたはA-Sに参加するの? するんだつたら相当厳しいわよ? リンカーノアなんて死にかけなんでしょう?」

「やうだよ~。だからむしろからには本当に運に任せてもよいと思ふんだ~」

「生きるか死ぬかは神のみぞ知るつてわけね。あんな神になんて任せたら碌なことにならなさそうだけど」

「良いではないですか～。邪神に祈るのだって乙なものですよ～」

その時だった。玄関の扉が開き、アルフが帰つてくる。

「ただいま。夕食買つてきたよ」

「あ、お疲れ～。シーチキンマヨネーズのおにぎり買つてきた？」

アルフが帰つてきた時、既に家にはスペアと眠つたフェイトしかいなかつた。他に人がいた気配すら残つていない。イデアが撒き散らしていた煙の匂いさえも。

「……どうしたもんかな」

『何がでしょうか、マスター』

家に帰されたアスカは悩んでいた。

ここはスッパリと魔法と縁を切る絶好のタイミングである。それに、放つておいても事件が解決することはわかっているのだ。ここで無理に関わる必要はないはずなのである。

だが、

この世界には原作との差異がありすぎる。

それがアスカの判断を鈍らせているのだった。存在しないはずのフエイトの姉、存在しないはずの執務官補佐。何よりも、アスカ自身と蔵人¹が原作にはない差異なのだ。一概に原作通りに進むという楽観論を述べることは、アスカにはできなかつた。

蔵人は「ヒロインが増えた」「くらいにしか思っていないのだろうが。

「……ここはあれだ」

アスカは携帯電話を取り、親以上に電話をしている親友を呼び出す。普段は2コールで出るその親友は、今日は珍しく待たせてから電話に出た。

『はい、どうかしましたか？』

「瑠奈、少し聞きたいことがあるんだ」

「つい困った時は、瑠奈に聞けば大抵良い案を出してくれる。

「あのさ、人生相談なんだが。面倒事に関わりたくない、でもその結果が悪い方向に転ぶのも嫌な時つてどうすれば良いと思つ？率直な意見を聞かせてくれ」

『……はあ、面倒事ですか。そうですね。厳しく言つなら、気になるなら自分で解決しろ！って感じですね。待っていたって良いことはありませんよ？結果が悪かつたら後悔するだけです』

「……わかった。サンキュー」

『いえいえ』

上手く誘導されたとは知らないアスカは、こつして原作介入を決意したのだった。

† † †

「……最低ね、あなた」

「いきなり何ですか？」

とあるビルの屋上、そこには一人の魔導師がいた。その気になれば、一時間でこの街の住民を皆殺しにできるほど強者である。その片方は管理局員だというだから、魔法とは恐ろしいものである。

「あなた、今迄そりやつてイクシオんくんを誘導してきたの？」

「Yes それが私の『仕事』です」

放つておいてもアスカは原作に首を突っ込むことになるのだろうが、自分から原作に介入してくれるのならば是非もない。瑠奈は、アスカが道を間違えずに『主人公』をやってくれればそれで良い。

「はあ～、わからないわね。あなたが教授を慕っているはわかっているけど、そこまですることなの？私からすれば育ての親って感じなんだけど」

「まあ、そうでしょうかね～。私は少し狂っているのかもしません～。でも、それで良いのですよ～」

携帯電話を置んだ瑠奈は苦笑した。

「私は教授を裏切らない。私は、死んで魂が消滅しても最後まで人の剣です。例え私以外のメンバーが全員裏切っても、ね？そのためには私は生まれてきた、だからこそ、私は最強で忠実であり続けなければならないのです」

珍しく間延びしないで淡々と話す『ルナ』は、イデアにはその外見以上に人形めいて見えた。使命に縛られた道具。剣は人を斬るために生まれてくる。それを体現したかのような存在。きっとルナは、最期まで教授のために戦うのだらう。四肢が？がれ、武器を失くし、首一つになつても。

「ふう、やっぱりあなたは人間離れしているわ」

「お褒めいただき光栄です～」

煙管を吸うイデアが嘆息すると、ルナは『瑠奈』に戻った。まるで、何もなかつたかのよう。

「では、私はもう帰ります。イデアはこの世界について大丈夫なのですか～？」

「大丈夫よ。名田上では現地への偵察と、ジュエルシードの探索の特別任務中だから。艦長とクロノは本部に報告中。正式な任務変更は明日になるわ」

「あ～、といつ」とは、海上戦はもうすぐですね～」

「やつよ。イクシオンくんにもできれば参加してもらいたいわ

「大丈夫でしょう。なんせ、彼は『主人公』ですから～」

「鷺ノ宮くんは？」

「……なぜか」 NN Dの春 さんを思い出しました～

† † †

『ジュエルシード、シリアル？！封印…』

モニターに映るなのはが、巨大な鳥の暴走体を封印する。

「う～ん なかなか優秀だわ。このままウチに欲しいくらいかも」

リンディの言葉にアスカは頷いた。確かに、なのはは魔導師としては破格の才能を持っている。恵まれた魔力量に、魔力の操作技能。それらを一ヶ月で使いこなすなど、現役の魔導師が膝を突くレベルだ。

「鶩ノ宮くんもそこそこね。まだ近接戦闘での間合いの取り方が下手だけど……まあ、一ヶ月ならこんなものよ」

一方、蔵人の実力もなかなかだ。イデアは敢えて辛口で評価しているが、それでも充分に優秀な部類だ。

現在、アスカたちとフェイトたちのジュエルシードの奪い合いは膠着状態と言えた。こちらは三つ、向こうは一つと、お互いに数はそう変わらない。

これは、いよいよか……。

海上での決戦が近い。アスカはそう睨んだ。
自分が覚えている数少ない原作だ。利用しない手はない。当日は自分も出て、ジュエルシードを原作以上に回収するのがアスカの思惑だった。

† † †

そして、アスカたちがアースラと行動し始めてから十日目。ついに事件が始まった。

割り当てられた部屋で一人、デバイスのチェックをしていたアスカは、アラーム警報が鳴る気を引き締めた。

始まつた……！

アスカが急いでブリッジに駆けつけると、モニターには暴走したジユエルシードに翻弄されるフロイトとアルフの姿があった。スペアの姿は見えない。

アスカに少し遅れてやつてきたのはたたかモニターの映像を見て唖然とする。

「あ、あのー私急いで現場に」

「その必要はないわ」

なのはの言葉を、イデアがスッパリと両断する。

「放つておけばあの子は自滅するもの」

「そんなん……！？」

「仮に自滅しなければ、力を使い果たしたところで呪けば良いの。何なら、私たちがあの子に攻撃するといつのも有りよ」

「おーおー……」

原作で書つはずだったクロノの言葉をイデアが書つたことにも驚いたが、その内容の悪辣さにアスカは思わず顔を引きつらせる。

「イデア、そこまでだ。今のうちに捕獲の準備を」

本来ならば悪役に徹するはずのクロノが仲裁に入ることで、場の空気は何とか保たれた。

「私たちは、常に最善の選択をしなきゃいけないわ。残酷に見えるかもしれないけれど、これが現実」

「でも……」

内容そのものは悪辣極まりないが、イデアが言つたことは間違つてはいない。わざわざ危険な手を使う必要はない。

その時である。転送のゲートが突然開き、蔵人となのはがそれに駆け込んだ。

「君はッ！」

「待ちなさい！」

逸早く気づいたイデアがコーノに駆け寄り、転送をやめさせようとする。

俺に誘いはなしかよ。

嘆息しながら、アスカはコーノの前に立ち塞がつた。

「お前は！」

「アスカくん！？」

「アスカ！？ビリして！？」

三人が驚く中、アスカは苦笑する。

「行くんだろう？それくらいはお見通しだ。今度は俺も誘え」

「……邪魔する気？」

立ち塞がるアスカに、最後の確認と言わんばかりの目つきで問いかけるイデア。だが、アスカはその程度では怯まない。

「悪いな、殺氣とかは最近で慣れたんだよ。コーカー！」

「ツ！あの子の結界内へ、転送！！」

そのままなのはと藏人は結界内へ転送されていった。

「……あなたはもう少し賢い人だと思っていたわ、イクシオンくん」

「そりか？俺はアンタらが思つていてる以上に馬鹿なんだぜー！」

「うわっ！？」

そのままコーカーと肩を組んだアスカは、そのまま転送ポートへと一人で飛び退る。

「あなた！」

「行くぞユーノ！転送しろツ！」

「ああ、もう！無茶苦茶だよアスカは！」

笑いながらそう言つユーノと共に、アスカたちも結界内へと転送されたのだった。

第十四話

その後は原作通り、否、原作以上の火力と人数による、ジュエルシードの封印となつた。

なのはとフェイトはもちろん、アスカと蔵人の二人が加わったことにより、原作以上にスマーズに封印は終了。そして、

「友達に、なりたいんだ」

なのはの心からの言葉に、フェイトは答えることができなかつた。誰もがなのはとフェイトを見守る中、それは訪れる。

雷鳴が轟き、紫電が海原を揺るがす。

「か、母さん……！？」

一番早く動いたのは、以外にも蔵人だつた。

原作知識によりプレシアからの次元跳躍魔法を予め知つていた蔵人は、この瞬間を待ち望んでいたのだ。

「フェイト、危な　　ぶげらつ！？」

「はい邪魔！！」

しかしフェイトを助けたのは蔵人ではなく、幻術で姿を隠して状況を見守っていたスペアだつた。

どさくさに紛れてフェイトに抱きつこうとしていた蔵人を石突で殴り飛ばし、

「でえりやああああああああああ！」

上空からの落雷を切り裂いた。

「姉さん！？離れていてつて

「説明は後だよ！アルフ！」

「 ッー」

スペアの言葉にハツとしたアルフは、ジュエルシードを掴み取ろうと飛翔した。しかし、転送で割り込んだクロノがそれを阻む。

「邪魔あーするなあー！」

押し負けるッ！

そう直感したクロノは、ジュエルシードを掴み取ろうと手を伸ばした。だが、それを見逃さないスペアが、アルフに先んじてクロノを海に叩き落す。

「ジュエルシード、封印！」

『 Sealine』

そのまま全てのジュエルシードを格納し、スペアが安堵の息を吐いた。

それに焦つたのはアスカである。原作ではここでクロノが三つのジュエルシードを奪うはずだった。それなのに全てのジュエルシードが奪われてしまった。自分が居たというのに原作よりも状況が悪化してしまった。

アスカは歯噛みし、せめてスペアだけでも捕まえようとした時だった。

「目標を達成した瞬間こそが、最も人間が油断する瞬間なのよ」

『Liontning Road』

スパーク音をBGMに、瞬間移動じみた速さで現れたイデアがスペアに剛斧を叩きつけた。しかもシールドを足元に張ることで衝撃を逃がせないようにして、文字通りスペアを叩き潰す。

「がッは！？」

「姉さんッ！」

バリアジャケットでも吸収しきれない衝撃がスペアの内臓を傷つけ、それが吐血という形で表れる。

そんなことはお構いなしと言わんばかりの手際でイデアはスペアをバインドで拘束した。アルフがスペアを助け出そうとすると、イデアは動けないスペアの首に斧を突きつける。

「お前……！」

「抵抗したらこの子の首を刎ねるわ。それでも良いなら……かかるべきなさい、ワンちゃん」

その管理団員とは思えない手口で、フロイトとアルフだけでなくアスカやなのはたちも驚愕する。

逆に、イデアは余裕の笑みで足元のシールドに転がるスペアを踏みつけた。

そして、

「やれるもんなら！」

スペアも必勝の笑みを浮かべた。

「やつてみろ！」

『Shield Break』

足場であるシールドが破壊され、イデアはバランスを崩した。それを見逃さずスペアはバインドを破壊し、逆にイデアをバインドで拘束する。

「アルフ、転送して！」

「あいよ……」

息も絶え絶えな様子のスペアの肩をフェイトが抱え、アルフは転送魔法を発動する。

「逃がすわけないでしょ！」

しかしイデアもバインドを速攻で破壊し、その剣斧をアルフに

「やめてよー」

叩きつけようとした瞬間、なのはがアルフを庇つように前に出た。両手を広げ、通せんぼをするようにイデアの前に立ち塞がる。流石に味方であるなのはを攻撃するのは躊躇われたのか、一瞬イデアが斧を止めた。

その隙にフェイトたちは転送魔法で逃走するのだった。

† † †

「指示や命令を守るのは、個人のみならず集団を守るためのルールです。勝手な判断や行動が、あなたたちだけでなく周囲の人たちも危険に巻き込んだかもしれないということ、それはわかりますね?」

『……はい』

リンディの言葉は全て正論だった。そのせいでもアースラが攻撃されたということは事実なのだ。

「本来は厳罰に処すところなのですが……結果として、いくつか得るところがありました。よって今回のことにについては、不問とします」

アスカたちは顔を見合せた。命令違反をした上、ジュエルシードを全て奪われ、あまつさえ逃走を許してしまったのだ。良くても搜査から外されるところとくらには覚悟していた。

「でも、あなたたちが命令違反したことは変わらないの。」
「ことはもうやめてよね」

「そういう君はどうなんだ！君の攻撃は明らかにあの子を殺そうとしていただろう！人質だつてそうだ！」

イデアの苦言に蔵人がいきり立つた。確かに、アスカから見てもスペアへの攻撃はやり過ぎに映つた。攻撃するのは良いにしても、血を吐くまで攻撃するのは駄目だろう。それに管理局員が人質をとるような行為も印象が悪い。

蔵人の反論に、イデアは肩を竦めた。

「あれは見た目ほどの威力ではないわ。あなたやイクシオンくんレベルのバリアジャケットなら倒げりふくらいで済む。それは

『それは私が保証します』

突然の声にアスカは辺りを見回した。

『マスター、ここからの説明は私めが』

「OK、任せるわ」

声の発生源はイデアが制服から取り出した黒いカードからだった。どうやらあの剣斧の待機形態らしい。

『マスターの力加減は完璧でした。あれほどのダメージが彼女に入つたのは、バリアジャケットの防護機能がまともに働いていなかつたのが原因ではないかと』

「つまり、彼女　　スペアさんのバリアジャケットは装甲が薄い
といふことかしら?」

『薄いを越え、見た目だけの張りぼてといったところです。あれで
は機能していないも同然かと』

リング黛の質問にも淡々と答えるそれは、なるほどイデアのデバイ
スらしいといえばらしい。

「人質にしてもそうよ。あれは無用な戦闘行為を止めるためだつた。
人質をとれば事件が止められるといつのならば、私は何人でも人質
をとるわ」

「……グレイス執務官補佐。確かにあなたの行為は合理的でしたが、
今後はそういう行為は控えるようにしてください」

「了解しました、艦長」

素直に了解の意を伝えたイデアは、話は終わつたとばかりに黙り込
んだ。

「……さて、問題はこれからね。クロノ、事件の大元について何か
心当たりが?」

「はい。ハイミィ、モニターに」

『はいはい』

モニターに映し出されたのは、黒髪で長身の女性だった。目つきは

鋭く、猛禽を思わせる。

「あーり……ー」

「やつ、僕らと回じリシテチルダ出身の魔導師『プレシア＝テスター
ロッサ』」

コイツが！』とアスカは手を握り締める。彼女が余計なことをしなければ、自分はこんな日常に巻き込まれずに済んだ。そう思つと、アスカにはプレシアを憎んでも憎みきれなかつた。

＋ ＋ ＋

「良くやつたわ、フェイト」

「……はー」

原作とは違ひ全てのジュエルシードを奪取したフェイトは、プレシアから鞭を受けずに済んでいた。しかし、傍に控えるアルフ共々その表情は晴れない。

先程の事件が原因でスペアは数箇所の骨折、リンクカーボアの重大な損傷、さらに内臓はズタズタだった。スペアは現在、時の庭園にある白室で眠つている。

もはや、いつ死んでもおかしくない。実質、危篤状態であった。あの一撃でここまでダメージを受けるはずがない。スペアは、ずっと前から身体のことを探していったのだ。

「……あ、あの、姉さんは……姉さんは、助かるんですか？」

「ええ、大丈夫よフュイト。母さんに任せておけば、きっとスペアは元気になるわ。だから、残りのジュエルシードを奪つてきて」

「……はい、母さん」

フュイトには、もはや母親を信じるといつ手立て以外に残されていなかつた。

プレシアと別れたフュイトとアルフは、そのままスペアが眠る部屋に向かつた。そこでは呼吸器などの機械に囲まれ、身体中が包帯まみれのスペアが眠つてゐる。トレーデマークの眼帯もはずされていた。目を覚ます様子はない。

「姉さん、『ごめんね……。私のせいで』

「フュイトのせいじゃないよー。アタシのせいだ……。アタシがもつとちゃんとしていれば……。」

頭に浮かぶのは、三角形の魔方陣を開いたあの黒い髪の女。

「アイツ、絶対に許さないー！今度会つたらだじゃおかないよー！」

「……やめて、おこたほつが良じよ……？」

アルフの言葉に、眠つていたスペアが答えた。薄つすらと目を開き、ほとんど唇を動かさずに話している。

「姉さんー。」

「スペア、アンタ大丈夫なのかいー！？」

「な……んとか」

普段の色白の肌が、ここに来てさらに白くなっている。呼吸も浅く、呂律も回っていなかつた。明らかに大丈夫ではない。

「ジュエルシードは、どうなつたの？」

「大丈夫だよ。六個とも回収した。母さんも褒めてくれてたよ」

「そつか……」

スペアには既に普段の快活さはどこにもなく、話すことも辛そうだ。実際、スペアは話すことになると相当の体力を使っていた。腕を動かすことすらできない。

「フュイト、無理しないでね……？何かあつたら呼んで。すぐに助けにいくから」

「なに言つてるんだい！そんな身体で何ができるって言つんだよー！」

「そうだよー。ジュエルシードは私とアルフに任せて、姉さんはゆっくり休んで」

「…………うん」

弱りきつたスペアを見て、フュイトとアルフは決意したのだった。絶対にジュエルシードを持ち帰つてみせると。

アルフは管理局に投降するという流れはなくなつた。

こうして、物語は原作を外れていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3406z/>

ゲームみたいな第二の人生を貰ったぜ！

2012年1月5日19時51分発行